史跡 斎宮跡

平成25年度発掘調査概報

2015年3月

斎宮歴史博物館

第180次調査区全景（西から）

第181次調査区全景（東から）

序

平成26年、斎宮歴史博物館は開館25周年を迎えました。史跡斎宮跡の調査・研究、普及・公開活動の拠点として平成元年に設置された当博物館は、史跡内に立地する全国的にも珍しい博物館として、今日まで活動を続けています。その中で、平成25年度から着手した斎宮寮庁の復元建物工事は順調に進んでおり、毎月実施している建築工事見学会は、地元の方々をはじめ、毎回多くの見学者が訪れるなど、高い関心が寄せられています。

今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、下園東区画周辺で行ったものです。第180次調査では、規格的に配置された建物を確認し、下園東区画にも西加座北区画と同様に、倉庫群が存在したものと考えられます。また、方格地割の北側隣接地で実施した第181次調査では、方格地割北辺道路の北側溝を踏襲したと考えられる溝や掘立柱建物などを確認し、一部ではありますが、方格地割外の実態が明らかとなりました。調査で得られた新たな成果は、地元明和町をはじめ、県民や斎宮跡を訪れる皆様に還元し、積極的に情報発信していきたいと考えています。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2015（平成27）年３月

斎宮歴史博物館
館　長　　伊　藤　久 美 子

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成25年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第180・181次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第179次調査報告書は、別途明和町が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）による。

5　遺構表示記号は次のとおりである。

　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＨ：竪穴住居　ＳＤ：溝　ＳＦ：道路　ＳＫ：土坑

　Pit：柱穴、ピット

6　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っている。遺物写真は縮尺不同である。

7　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989年）を用いて補っている。

8　遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。

9　本書の執筆は、伊藤文彦・新名強があたり、編集は調査研究課で行った。遺物写真の撮影は伊藤文彦が行った。また、発掘調査および資料整理については、泉雄二・大川勝宏・杉原泰子・八木光代・水木夏美・大橋由紀が補佐した。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　第180次調査 …… 7
Ⅲ　第181次調査 …… 21

挿 図 目 次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 3
第Ⅰ－２図　平成25年度発掘調査区位置図 …… 4
第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図 …… 5
第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6
第Ⅱ－１図　第180次調査　グリッド図 …… 7
第Ⅱ－２図　第180・181次調査区位置図 …… 8
第Ⅱ－３図　第180次調査　遺構平面図・断面図 …… 10
第Ⅱ－４図　第180次調査　ＳＫ10637・10640・10641遺構平面図・断面図 …… 10
第Ⅱ－５図　第180次調査　遺物実測図 …… 13
第Ⅱ－６図　下園東区画主要建物配置図〔Ⅱ－２期〕 …… 15
第Ⅲ－１図　第181次調査　グリッド図 …… 21
第Ⅲ－２図　第181次調査　遺構平面図・土層断面図 …… 22
第Ⅲ－３図　第181次調査　遺物実測図（１） …… 26
第Ⅲ－４図　第181次調査　遺物実測図（２） …… 27

写 真 図 版 目 次

巻頭　第180次調査区全景（西から）／第181次調査区全景（東から）
Ⅱ－１　第180次調査遺構（１）　ＳＢ10630（西から）…… 17
Ⅱ－２　第180次調査遺構（２）　ＳＢ10630・ＳＫ10640（東から）
／ＳＢ10645・10646・10647（北から）…… 18
Ⅱ－３　第180次調査遺構（３）　ＳＢ10632・10633（北から）
／ＳＫ10637・10639・10640（北から）…… 19
Ⅱ－４　第180次調査遺物 …… 20
Ⅲ－１　第181次調査遺構（１）　ＳＤ10711（北から）／ＳＨ10699・10700（東から）…… 30
Ⅲ－２　第181次調査遺構（２）　ＳＢ10690（東から）／ＳＤ10706・10707・10708（東から）…… 31
Ⅲ－３　第181次調査遺物 …… 32

表 目 次

第Ⅰ－１表　平成25年度　発掘調査一覧表 …… 2
第Ⅱ－１表　第180次調査　掘立柱建物一覧表 …… 11
第Ⅱ－２表　第180次調査　遺構一覧表 …… 11
第Ⅱ－３表　第180次調査　遺物観察表 …… 14
第Ⅲ－１表　第181次調査　掘立柱建物一覧表 …… 24
第Ⅲ－２表　第181次調査　遺構一覧表 …… 24
第Ⅲ－３表　第181次調査　遺物観察表 …… 28

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年３月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡中枢部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まってきたことから、平成18年度に史跡整備の在り方検討会を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、平成22年３月に『史跡斎宮跡東部整備基本計画書』が策定され、平成23年度からは現地での工事に着手している。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年６月６日に国の認定を受けている。なお、同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした歴史公園整備を計画している。

発掘調査

下園東区画では、これまで第10・18・23・47次調査が行われたほか、平成22年度より斎宮歴史博物館および明和町が主体となり、当区画の実態解明のために、第166・168・173・174-8・177・178-2次調査が行われている。これらの成果により、下園東区画では、規則的に配置された平安時代前期の10棟の建物が確認され、西加座北区画と同様の建物群が存在している可能性が高まっているが、時期や両者の関係解明が課題となっている。

上記の課題を受け、これらの建物群や北辺道路の確認、方格地割北側の遺構状況を確認するため、第180・181次調査として斎宮歴史博物館が主体となり366.2㎡の計画調査を実施した。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物３棟の復元や平安時代の方格地割の広がりを示す、区画道路の整備など、平安時代の斎宮の姿を再現するもので、平成25年度は、平成27の完成を目指して、復元建物建設工事に着手した。

発掘調査現場の公開・活用

近年斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な利活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘を開催している。

2　調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成25年度
　泉　雄二（副参事兼課長）
　大川勝宏（主幹兼課長代理）
　新名　強（主査）
　伊藤文彦（技師）

平成26年度
　大川勝宏（課長）
　穂積裕昌（主幹兼課長代理）
　新名　強（主査）
　伊藤文彦（技師）

3　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成25年７月30日、平成26年２月24日の２回、委員会を開催し、第180・181次調査を含む下園東区画の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得たほか、復元建物については斎宮跡研究員も同席

して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。

（五十音順・敬称略）

〔指導委員〕

浅野　聡（三重大学大学院准教授）
稲葉信子（筑波大学大学院教授）
金田章裕（人間文化研究機構機構長）
佐々木恵介（聖心女子大学教授）
鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）
所　京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）
八賀　晋（三重大学名誉教授）
増渕　徹（京都橘大学教授）
松村恵司（奈良文化財研究所長）
渡辺　寛（皇學館大学名誉教授）
綿貫友子（大阪教育大学教授）

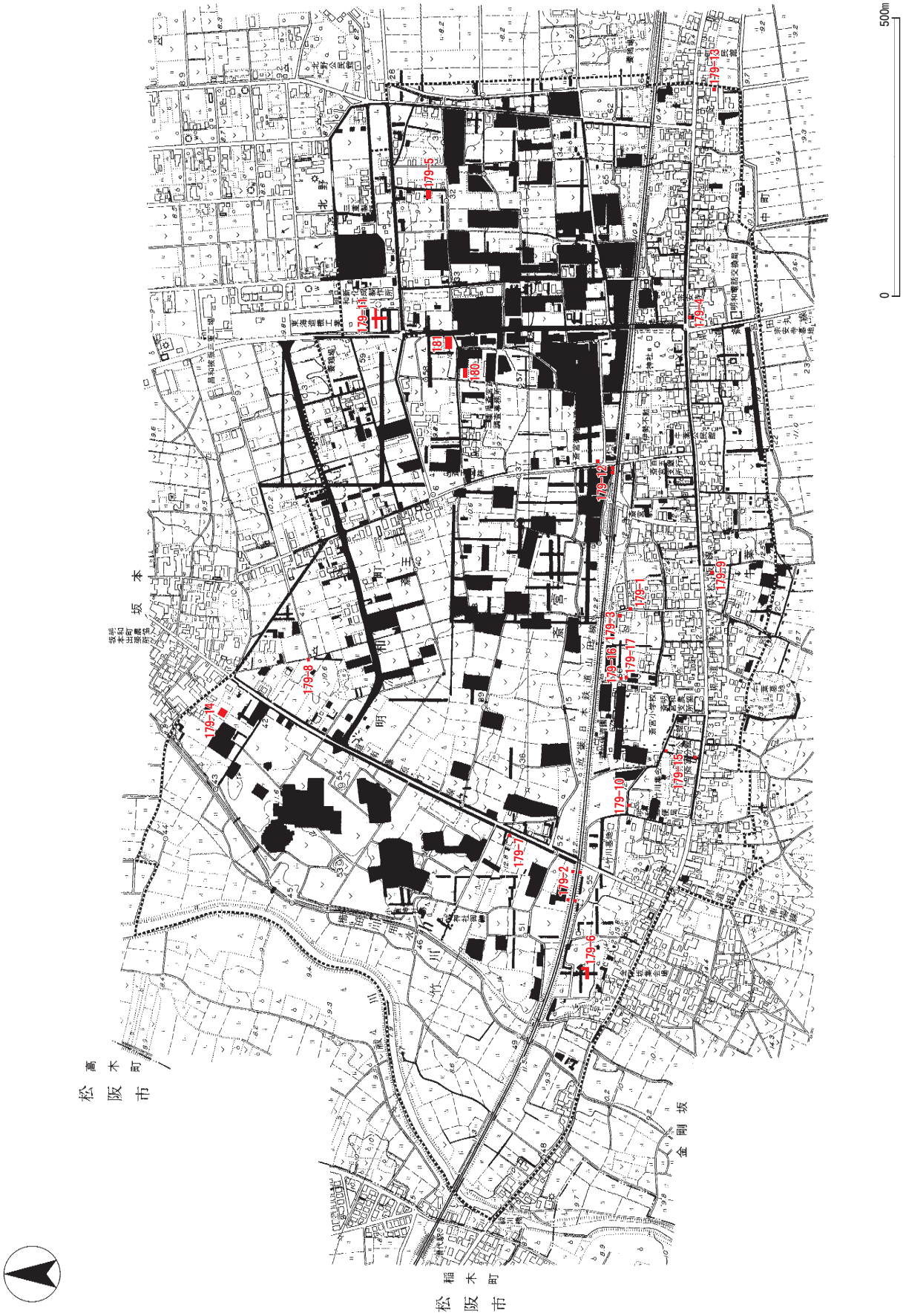
〔研究員〕

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

調査次数	地区	面積（㎡）	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区区分
180	Q9・R9	96.6	H25.7.23～H25.9.27	明和町斎宮字下園	明和町	計画発掘調査	1
181	R8	269.6	H25.7.23～H25.12.6	明和町斎宮字楽殿	明和町	計画発掘調査	1
179-1	M12	2.5	H25.5.1	明和町斎宮字広頭	個人	給水管設置	3・4
179-2	H10・H11	9.5	H25.5.11・H25.5.15	明和町竹川字中垣内	鉄道会社	鉄塔撤去・新設	3
179-3	M11	2.9	H25.5.16	明和町斎宮字広頭	個人	住宅改築	4
179-4	S13	2.3	H25.5.21	明和町斎宮字中西	個人	浄化槽設置	4
179-5	U8	72.0	H25.9.4～H25.9.19	明和町斎宮字東前沖	個人	住宅新築	3
179-6	G11	154.0	H25.10.22～H25.12.6	明和町竹川字中垣内	個人	発掘調査	3
179-7	I9	2.7	H25.10.19	明和町竹川字中垣内	個人	浄化槽設置	4
179-8	L6	26.8	H25.12.17～H25.12.25	明和町竹川字古里	個人	住宅新築	3
179-9	N13	3.6	H25.12.19	明和町斎宮字牛葉	個人	浄化槽改修	4
179-10	J12	2.0	H25.12.20	明和町斎宮字東裏	個人	浄化槽設置	4
179-11	R7・S7	224.0	H26.1.7～H26.1.28	明和町斎宮字西前沖	明和町	発掘調査	3
179-12	P11	21.8	H26.1.22～H26.1.23	明和町斎宮字内山・御館	明和町	発掘調査	1
179-13	W13	3.6	H26.1.30	明和町斎宮字笛川	個人	住宅改築	4
179-14	K4	95.0	H26.2.12～H26.2.20	明和町竹川字古里	個人	太陽光発電施設設置	3
179-15	K12・K13	2.0	H26.2.21・H26.3.1	明和町斎宮字東裏	明和町	側溝付替	3
179-16	L11	13.0	H26.3.28	明和町斎宮字広頭	明和町	汚水貯留槽設置	3
179-17	L12	3.0	H26.3.28	明和町斎宮字広頭	明和町	児童クラブ建設	3

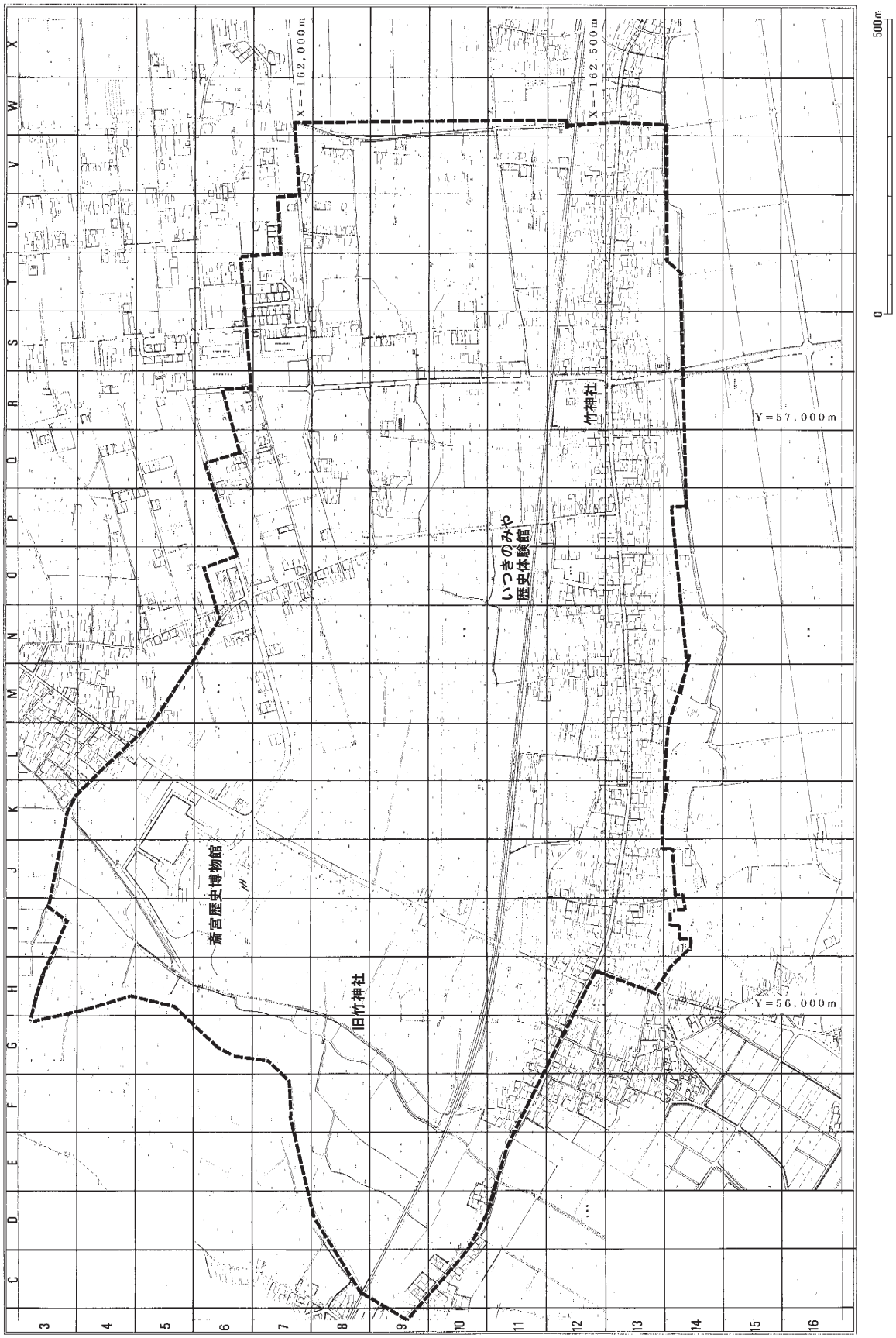
第Ⅰ－１表　平成25年度　発掘調査一覧表

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1:50,000）　国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」（平成４年）より



第Ⅰ－２図　平成25年度発掘調査区位置図（1:10,000）

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図（1:5,000）



第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002年）

Ⅱ　第180次調査
（６ＡＱ９・Ｒ９　下園地区）

１　はじめに

第180次調査区は、史跡東部に位置する方格地割の北部、下園東区画に位置している。下園東区画では、これまで第８－10・10・18－１・18－２・23・47・129・166・168・173・174－8・177・178－２次調査が行われており、平安時代の掘立柱建物や区画東辺の道路が確認されている。下園東区画では、これまでに平安時代前期の５間×２間の東西棟建物が10棟確認されており、東隣の西加座北区画と同様に規格的に配置された建物群が存在するものと考えられる。今回の調査地は、この建物群の一つが位置しており、建物配置など下園東区画北西部の実態解明を目的として調査を実施した。

調査期間は平成25年７月23日から平成25年９月26日まで実施し、調査面積は96.6㎡であった。

２　地形と層位

調査区は標高10.2m程度の平坦地であり、現況は畑地として利用されている。北側には、方格地割の北辺道路が通る。調査区の南側は、南に向かって緩やかに傾斜しており、下園東区画の南端には東西方向の浅い谷筋が存在していたものと考えられる。

基本層位は、耕作土下に暗灰黄色砂質土の包含層が0.05～約0.2m堆積し、表土下0.3～0.4mで明黄褐色粘土の地山面を確認した。遺構は、この明黄褐色粘土層上面で検出している。

３　遺構

第180次調査では、斎宮跡の土器編年を基準とした時期区分でいうⅡ－１期からⅢ期にかけての掘立柱建物10棟、土坑６基、溝３条を確認した。

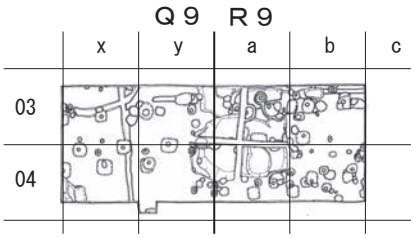
（１）斎宮Ⅱ－１期の遺構

ＳＫ10641　調査区中央に位置する土坑で、長径5.0m×短径3.8mの楕円形を呈する。後出するＳＫ10640とほぼ重複しており、遺構の上部は大部分が削平を受けている。そのため、調査段階ではＳＫ10640として掘削していたが、出土遺物が２時期に分かれることや、土層観察においてから２遺構に分かれることが判明し、底部の遺構については新たな遺構番号を付した。遺物は上下層の区別は行っていないが、底面付近から出土した古相を呈するものを当該遺構のものと判断した。出土遺物は、土師器皿（１・２）・杯（３）、須恵器杯蓋（４）・杯（５・６）・平瓶（７）が出土している。ＳＢ10630およびＳＫ10640に先行し、出土遺物より斎宮Ⅱ－１期に属するものと考えられる。

（２）斎宮Ⅱ－２期の遺構

ＳＢ10630　調査区中央に位置する桁行５間×梁間２間の東西棟の建物で、遺構の南半分は調査区外に展開する。柱掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、柱痕は0.2mを測る。柱間は桁行・梁間とも2.4mで、建物方向はＮ４°Ｗをであった。遺物は土師器皿（８）・甕、須恵器甕・平瓶（９）が出土している。北側柱列は土坑ＳＫ10640・10641と重複する。土層断面より、柱穴はＳＫ10641を切り込むものの、柱穴上部はＳＫ10640によって削塀を受けていることから、ＳＫ10641に後出し、ＳＫ10640に先行する。また、建物位置や建物方位から、下園東区画で規格的に配置された建物群の一つと考えられ、斎宮Ⅱ－２期に属するものである。

ＳＢ10633　調査区南西部に位置する桁行２間以上×梁間１間以上の建物で、遺構の南半部は調査区外に展開し、建物方向はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、柱痕は直径0.2m



第Ⅱ－１図　第180次調査　グリッド図（1:400）

第Ⅱ－２図　第180・181次調査区位置図（1:2,000）

を測る。柱間は桁行2.3m・梁間2.7m。遺構の重複関係より、ＳＫ10634に先行する。遺物は土師器皿・甕、須恵器が出土したのみで、詳しい時期は不明だが、柱掘形の規模が大きく、隅丸方形を呈することから、斎宮Ⅱ－２～３期に属すると考えられる。

（３）斎宮Ⅱ－３～４期の遺構

ＳＢ10645　調査区北東端で確認した桁行２間以上で、遺構の大半は調査区外に展開する。建物方向はＮ４°Ｗで、柱間は桁行2.0mを測る。柱掘形は一辺約0.6m～0.7mの隅丸方形を呈し、柱痕は0.2mを測る。遺物は土師器甕や須恵器が僅かに出土しているのみである。遺構の重複関係よりＳＫ10637に後出する。詳しい時期は不明だが、柱掘形の形状や大きさより、斎宮Ⅱ－３期に属すると考えられる。

ＳＢ10647　調査区南東端に位置する桁行２間以上の建物で、柱間は2.0mを測る。建物方向はＮ０°Ｅ。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈する。重複関係より、ＳＢ10646に先行し、ＳＢ10630より後出する。遺物は土師器、須恵器甕（16）、灰釉陶器段皿（15）が出土しており、斎宮Ⅱ－３期に属する。

ＳＢ10631　調査区北西部に位置する桁行２間以上×梁間１間以上の建物で、建物方向はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.4～0.6mの隅丸方形を呈し、柱痕は直径0.2mを測る。柱間は桁行2.3m。遺物は遺物は土師器や須恵器の小片が出土したのみで、詳しい時期は不明だが、柱掘形の規模が縮小するものの、形状は隅丸方形を呈していることから、斎宮Ⅱ－３～４期に属すると考えられる。

ＳＢ10636　調査区北部中央にて、南北棟建物の南側柱筋のみを確認した。桁行１間以上×梁間２間で、建物方向はＮ６°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.5mの隅丸方形もしくは円形を呈し、柱間は梁間1.8mを測る。土師器杯（17）・皿、須恵器、灰釉陶器が出土している。遺構の重複関係よりＳＫ10637に後出し、ＳＢ10638に先行する。出土遺物や重複関係から斎宮Ⅱ－３～４期に属すると考えられる。

ＳＢ10638　ＳＢ10636の南側に位置する東西棟建物で、南側柱筋のみを確認した。桁行３間×梁間１間以上で、建物方向は軸方位はＮ４°Ｗを測る。柱掘形は長径0.4mの円形を呈し、柱痕は0.15～0.2mを測る。土師器甕、須恵器、灰釉陶器が出土している。遺構の重複関係よりＳＢ10636・ＳＫ10637に後出し、斎宮Ⅱ－４期以降のものと考えられる。

ＳＢ10646　調査区南東部に位置する桁行２間以上×梁間１間以上の東西棟と考えられる建物で、建物方向はＮ２°Ｗを測る。柱掘形は一辺0.4～0.6mの隅丸方形もしくは円形を呈し、柱痕は直径0.2mを測る。柱間は桁行で1.7m。遺構の重複関係より、ＳＢ10647に後出する。土師器杯、灰釉陶器片が出土している。詳しい時期は不明だが、柱掘形の形状より、斎宮Ⅱ－３～４期に属すると考えられる。

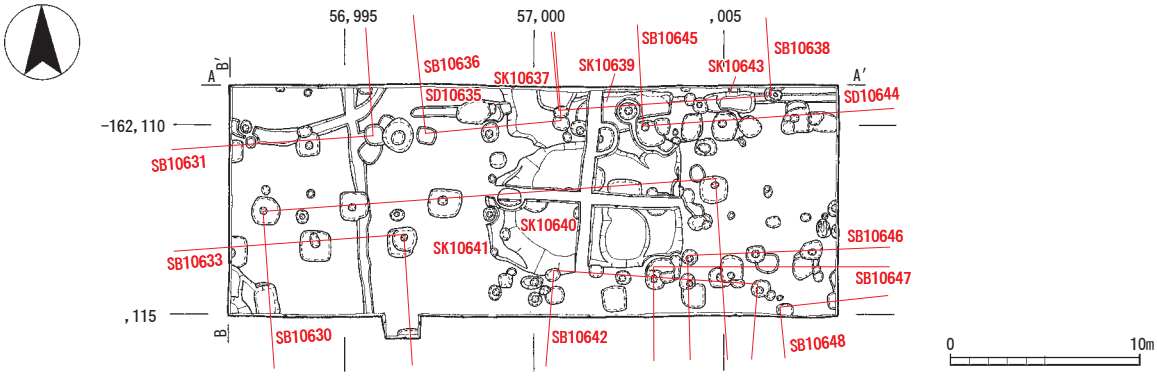
ＳＤ10644　調査区北東部に位置する溝で、長さ3.6m以上×幅0.2m、深さは0.05mを測る。ＳＢ10638に先行し、ＳＫ10639に後出する。土師器、須恵器杯が出土している。遺構の重複関係より、斎宮Ⅱ－３～４期に属する。

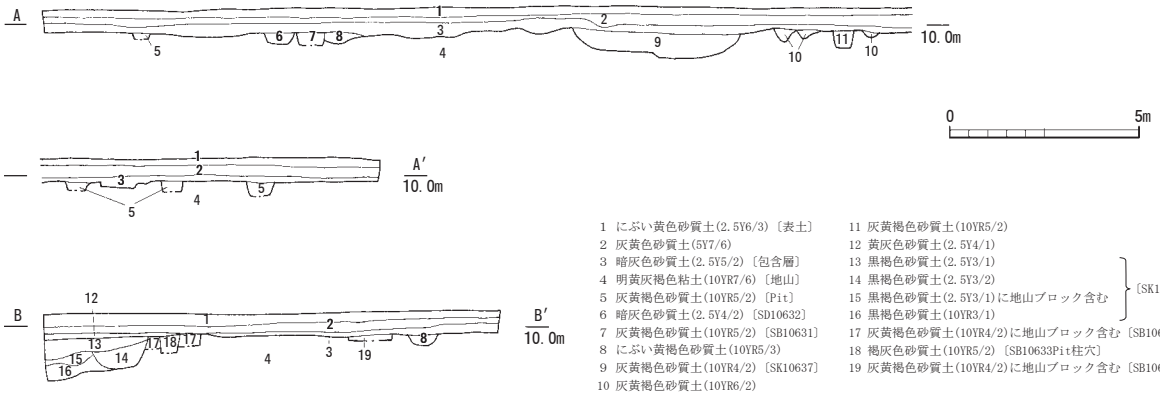
ＳＫ10637　調査区中央北端に位置する土坑で、長径2.5m×短径1.1mの長方形を呈し、深さは0.2mを測る。ＳＢ10636・10638に先行し、ＳＫ10639・10640に後出する。土師器杯（11）・皿、須恵器杯蓋（12）・甕・小壺、緑釉陶器、灰釉陶器椀（13）、瓦（14）、志摩式製塩土器が出土しており、斎宮Ⅱ－３期に属する。

ＳＫ10639　ＳＫ10637に重複する土坑で、調査区中央北端に位置し、長径2.6m以上×短径1.1m以上の不定形を呈する。ＳＫ106389、ＳＤ10645に先行し、ＳＫ10637に後出する。土師器杯蓋・甕・把手付甕、須恵器杯（10）が出土しており、斎宮Ⅱ－３期に属する。

ＳＫ10640　ＳＫ10641に重複する土坑で、長径4.5m×短径2.9mの長方形を呈し、深さは0.2mを測る。ＳＢ10630・10642・10647、ＳＢ10641に後出する。土師器杯（21～27）・皿（20）・甕（28～31）・高杯（32）、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀（33）・皿・段皿、鉄製品（34～36）が出土しており、斎宮Ⅱ－３期に属する。

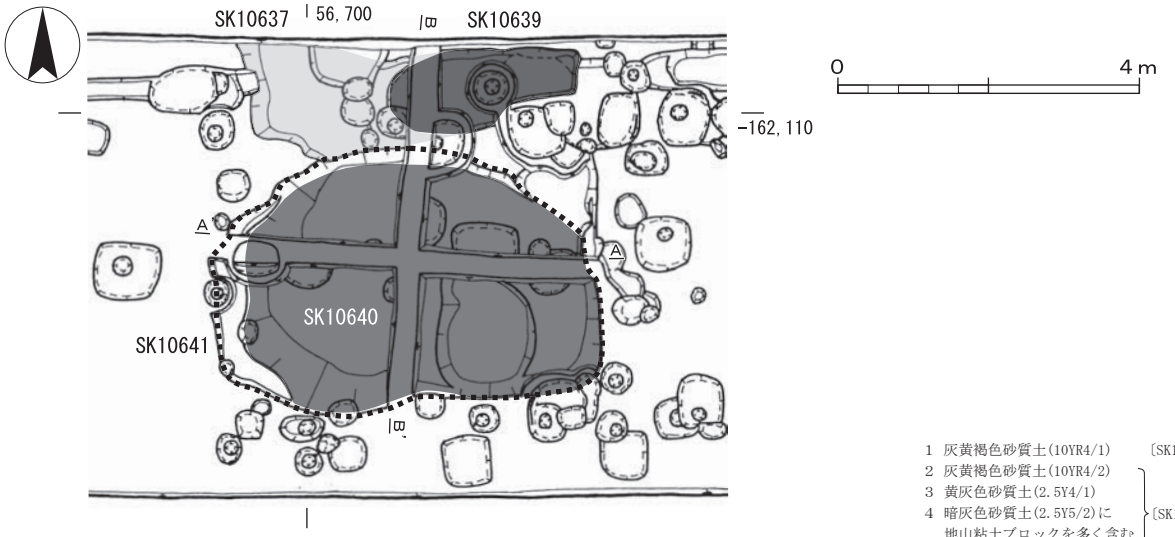
ＳＫ10643　調査区北東部に位置する土坑で、長径1.0m×短径0.5mの隅丸長方形を呈し、深さは0.1mを測る。土師器杯が出土している。遺構の重複関係よりＳＤ10644に先行し、斎宮Ⅱ－３～４期頃の遺構と考えられる。



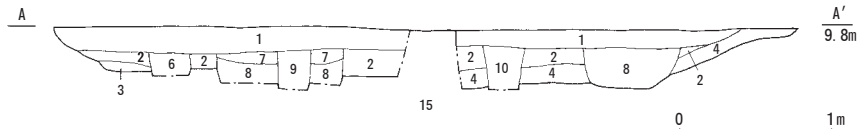


1 にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)〔表土〕
2 灰黄色砂質土(5Y7/6)
3 暗灰色砂質土(2.5Y5/2)〔包含層〕
4 明黄灰褐色粘土(10YR7/6)〔地山〕
5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)〔Pit〕
6 暗灰色砂質土(2.5Y4/2)〔SD10632〕
7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)〔SB10631〕
8 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)〔SK10637〕
10 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)
11 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
12 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
13 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
14 黒褐色砂質土(2.5Y3/2)
15 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)に地山ブロック含む
16 黒褐色砂質土(10YR3/1)
〔SK10634〕
17 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に地山ブロック含む〔SB10633Pit堀形〕
18 褐灰色砂質土(10YR5/2)〔SB10633Pit柱穴〕
19 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に地山ブロック含む〔SB10631〕

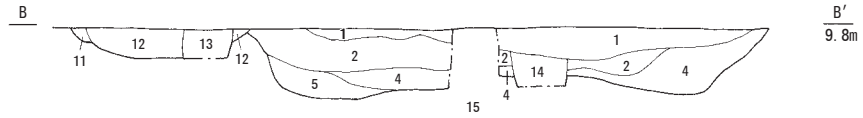
第Ⅱ－３図　第180次調査　遺構平面図（1:200）・断面図（1:100）



東西セクション



南北セクション



1 灰黄褐色砂質土(10YR4/1)〔SK10640〕
2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
3 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)
4 暗灰色砂質土(2.5Y5/2)に地山粘土ブロックを多く含む
5 黒褐色砂質土(2.5Y3/1)
〔SK10641〕
6 灰黄褐色砂質土(2.5Y5/1)〔Pit〕
7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に地山粘土ブロックを少し含む
8 黒褐色砂質土(10YR3/1)
〔SB10630 Pit堀形〕
9 褐灰色砂質土(10YR5/2)に地山粘土ブロックを少し含む〔SB10630 Pit柱痕〕
10 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)に地山粘土ブロックをやや含む〔Pit〕
11 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)〔SK10637〕
12 にぶい黄灰色砂質土(10Y4/3)〔SK10639〕
13 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)〔Pit〕
14 にぶい黄灰色砂質土(10Y4/3)〔Pit〕
15 明黄灰褐色砂質土(10YR7/6)〔地山〕

第Ⅱ－４図　第180次調査　ＳＫ10637・10640・10641遺構平面図（1:100）・断面図（1:50）

遺構名	調査時遺構名	ピット番号 ※(　)はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
ＳＢ10630	建物１	(x4)p1.p4.p5/(y4)p1/(a3)p13/(b3)p1/(b4)p1	Ⅱ－２	5(12.0)×2(4.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4	東西	N4°W	SK10640･10634より古 SK10641より新
ＳＢ10631	建物６	(x3)p4.p6	Ⅱ－３～４	2?(-)×1?(-)	(桁行) 2.3 (梁間) -	東西?	N4°W	
ＳＢ10633	建物３	(x4)p3.p6/(y4)p2	Ⅱ－２～３	2?(-)×1?(-)	(桁行) 2.3 (梁間) 2.7?	東西?	N4°W	SK10634より古
ＳＢ10636	建物５	(y3)p1/(a3)p6	Ⅱ－３～４	-×2(3.7)	(桁行) - (梁間) 1.8	南北	N6°W	SB10638より古 SK10637より新
ＳＢ10638	建物７	(a3)10.p11/(b3)p4.p13.p14	Ⅱ－４～	3?(-)×-	(桁行) 1.9 (梁間) -	東西	N4°W	SB10636･SK10637より新
ＳＢ10642	建物９	(a4)p4.p8/(b4)p4.p15	Ⅱ－４～ Ⅲ期	3(5.4)×-	(桁行) 1.8 (梁間) -	東西	N4°E	SK10640より新
ＳＢ10645	建物４	(a3)p2/(b3)p6.p10	Ⅱ－３	2?(-)×-	(桁行) 2.0 (梁間) -	東西?	N4°W	SK10639より新
ＳＢ10646	建物８	(b4)p14.p18	Ⅱ－３～４	2?(-)×1?(-)	(桁行) 1.7 (梁間) -	東西?	N2°W	SB10647より新
ＳＢ10647	建物２	(a4)p7/(b4)p6.p2	Ⅱ－３	2?(-)×-	(桁行) 2.0 (梁間) -	東西?	N0°W	SB10646より古 SB10630より新
ＳＢ10648	建物10	(b4)p16.p22	－	1?(-)×-	(桁行) - (梁間) -	東西?	N6°W	

第Ⅱ－１表　第180次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
ＳＤ10632	溝２	x3-x4	－	土師器、須恵器	SB10630より新
ＳＫ10634	土坑３	x4	－	土師器甕	SB10630・10633より新
ＳＤ10635	溝１	y3	－	土師器杯、須恵器杯蓋・甕	
ＳＫ10637	土坑２	y3-a3	Ⅱ－３	土師器杯・皿、須恵器杯蓋・甕・小壺、 緑釉陶器、灰釉陶器椀、瓦、志摩式製塩土器	SB10636・10638より古 SK10639・10640より新
ＳＫ10639	土坑５	a3	Ⅱ－３	土師器杯蓋・甕・把手付甕、須恵器杯	SB10638・10645より古 SK10637より新
ＳＫ10640	土坑１	x3-a4	Ⅱ－３	土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・甕、 灰釉陶器椀・皿・段皿、鉄製品	SB10630・10642・10647、 SK10637・10641より新
ＳＫ10641	土坑７	x3-a4	Ⅱ－１	土師器杯・皿、須恵器杯蓋・杯・平瓶	SB10630･SK10640より古
ＳＫ10643	土坑４	b3	Ⅱ－３～４	土師器	SD10644より古
ＳＤ10644	溝３	a3-b3	Ⅱ－３～４	土師器、須恵器杯	SB10638より古 SK10639・10643より新

第Ⅱ－２表　第180次調査　遺構一覧表

（４）時期不明の遺構

ＳＢ10642　調査区南東部に位置する桁行３間×梁間１間以上の東西棟の建物で、建物方向はＮ４°Ｅを測る。柱掘形は直径0.4～0.5mの円形を呈し、柱痕は直径0.15mを測る。柱間は桁行で1.8m。ＳＫ10640に後出し、遺物は土師器皿・台付皿、須恵器甕が出土している。詳しい時期は不明だが、遺構の重複関係より、斎宮Ⅱ－４期以降に属する。

ＳＢ10648　調査区南東隅に位置する桁行１間以上の建物で、建物方向はＮ６°Ｗを測る。柱掘形は直径0.4～0.5mの隅丸方形を呈する。土師器、須恵器、灰釉陶器の小片が出土している。

ＳＤ10632　調査区西部を南北方向にはしる溝で、幅0.2～0.4m、深さは0.05～0.1mを測る。遺構の重複関係より、ＳＢ10630に後出する。土師器、須恵器壺が出土している。

ＳＤ10635　調査区中央北部を東西方向にはしる溝で、幅0.3m、深さは0.05～0.1mを測る。土師器杯、須恵器杯蓋・甕が出土している。ＳＤ10644の延長上にあるため、同一遺構の可能性も考えられるが、ＳＫ10637・10639との重複部分で遺構を検出できなかったため、別遺構とした。

４　遺物

（１）斎宮Ⅱ－１期の遺物

ＳＫ10641出土遺物（１～７）　ＳＫ10460下部の残存部から出土したもの。１・２は土師器皿Ａで、器壁はやや厚い。口縁端部が１は内湾するのに対し、２は外反する。ともに遺物表面の残存状態が悪いものの、体部下半にケズリ調整が認められる。３は土師器杯Ａ。器壁は薄く、ケズリは見られない。４は須恵器杯蓋で、口径は15㎝程度と小さく、杯に伴うものと考えられる。５は須恵器杯Ｂで、口縁端部は僅かに外反する。外面底部と体部下半にはロクロケズリが施され、体部と底部の境界には、明確な稜線を有する。焼成時の歪みからか、底部中央が高台より下方へ張出し、安定性に欠ける。６は須恵器杯Ａで、外面底部から体部にかけては緩やかに立ち上がる。見込み部は体部との接合部分で強いナデ調整が施されるため、窪みを有する。７は須恵器平瓶で、口縁部の一部と体部の上半部が出土した。体部上面には、全面に自然釉がかかり、把手の痕跡も残る。これらの遺物は、概ね斎宮Ⅱ－１期に属するものである。

（２）斎宮Ⅱ－２期の遺物

ＳＢ10630出土遺物（８・９）　８は土師器皿Ａで、外面底部にはケズリが施される。９は須恵器平瓶。７の平瓶に比べ、器高が低く、屈曲部は上部・下部とも鋭い。遺物は斎宮Ⅱ－１期のものと考えられるが、遺構がＳＫ10641を削平していることから、この遺構のものが混入した可能性が高い。

（３）斎宮Ⅱ－３～４期の遺物

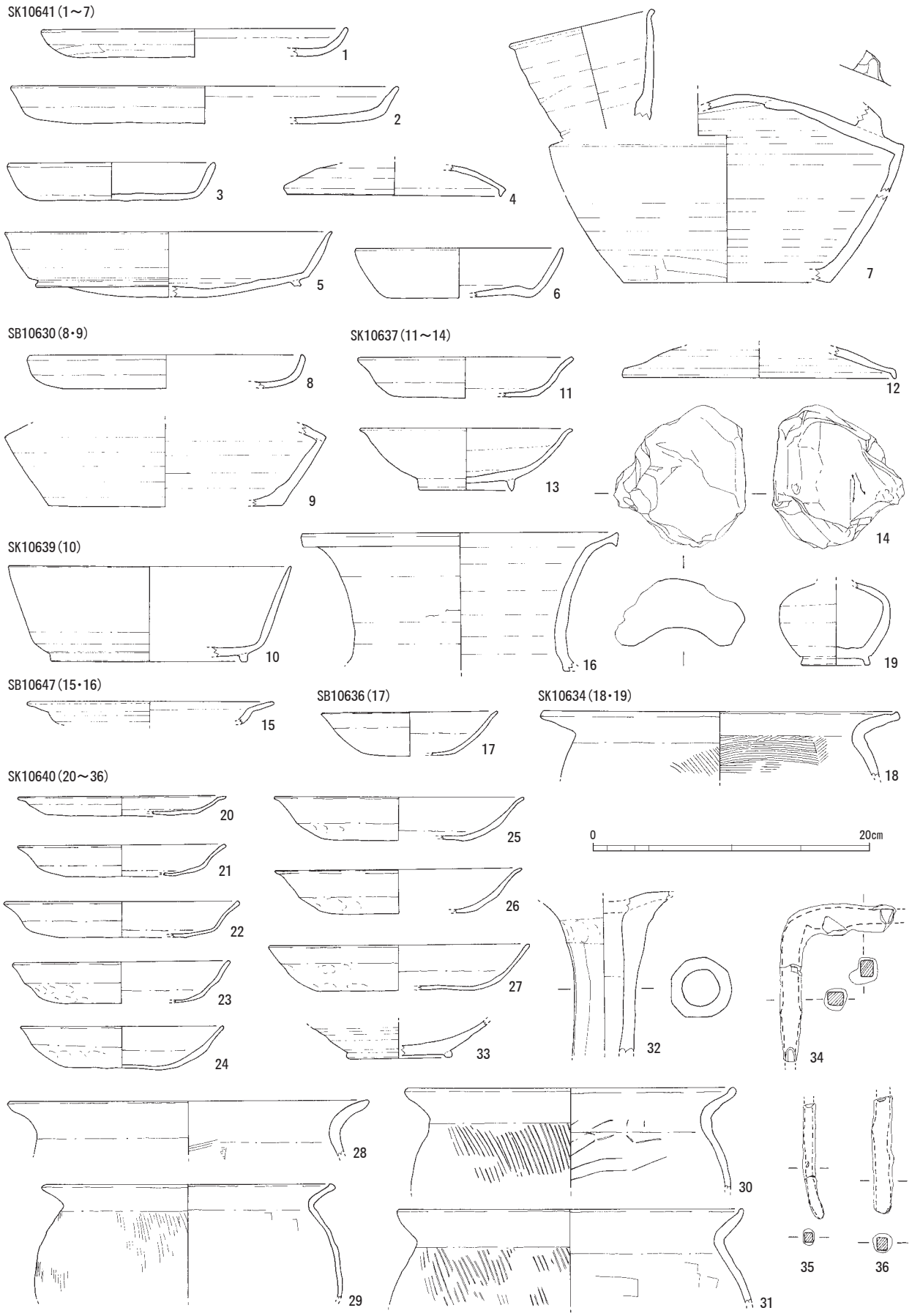
ＳＫ10639出土遺物（10）　10は須恵器杯Ｂで、つくりは比較的精緻であるが、胎土内の空気は十分に抜けておらず、焼成時の膨張による膨れが多数見られる。この遺物については斎宮Ⅱ－２期に属するものであるが、遺構はＳＫ10637に後出し、他の出土遺物から考えても、遺構の時期は斎宮Ⅱ－３期に属するものと考えられる。

ＳＫ10637出土遺物（11～14）　11は土師器杯Ａで口縁部は外反する。12は須恵器の杯蓋。13は灰釉陶器椀で、三日月高台を有し、器壁も薄く、施釉も丁寧であることから、猿投窯編年のＫ－90窯期第２段階のものと考えられる。14は丸瓦で、残存状態が悪いため調整ははっきりしないが、内面にはかすかに布目痕が残る。方格地割内で瓦が出土することは稀であり、当調査区が方格地割北端に位置していることを考えると、方格地割外のものが混入したことも考えられよう。斎宮Ⅱ－３期に属するものである。

ＳＢ10647出土遺物（15・16）　15は灰釉陶器段皿で屈曲部は鋭い。16は須恵器甕Ａの口縁部。焼成はやや軟質で、外面には粘土接合痕が残る。斎宮Ⅱ－３期に属すると考えられる。

ＳＢ10636出土遺物（17）　17は土師器杯Ａで、器壁は極めて薄い。外面体部下半にはオサエ痕が残る。斎宮Ⅱ－３～４期に属する。

ＳＫ10634出土遺物（18・19）　18土師器甕で、口縁部が水平に開くことから、長胴甕になる可能性もある。19は須恵器の長頸壺で、小型のもの。高台まで精緻に造られており、調整は比較的丁寧である。斎宮Ⅱ－３～４期に属するものと考えられる。



第Ⅱ－５図　第180次調査　遺物実測図（1:4）

番号	器種	器形	地区遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	皿A	SK10641	口径 器高	21.8 2.1	外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁部 1/12		001-05
2	土師器	皿A	SK10641	口径 器高	27.7 2.7	外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 4/12		001-04
3	土師器	杯A	SK10641	口径 器高	14.8 2.7	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙 5YR7/6	口縁部 3/12		002-01
4	須恵器	杯蓋	SK10641	口径 残高	15.4 2.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	口縁部 2/12		001-02
5	須恵器	杯B	SK10641	口径 器高	23.4 4.7	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ、貼付高台 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部 3/12	底径 18.9cm	002-06
6	須恵器	杯A	SK10641	口径 器高	14.8 3.6	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰 7.5Y5/1	底部 2/12		001-01
7	須恵器	平瓶	SK10641	口径 底径	10.3 15.0	外面:ロクロナデ、ナデ、ヘラケズリ、ロクロケズリ 内面:ロクロナデ、ナデ、オサエ、ロクロケズリ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	体部 1/3	最大径 25.5cm	003-01
8	土師器	皿A	SB10630	口径 器高	19.6 2.4	外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR7/8	口縁部 1/12		006-02
9	須恵器	平瓶	SB10630	底径 残高	16.8 6.0	外面:ロクロナデ、ナデ、ロクロケズリ 内面:ロクロナデ、ナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部 1/12	最大径 23.2cm	006-03
10	須恵器	杯B	SK10639	口径 器高	20.2 6.9	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ、貼付高台 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部 3/12	底径 13.9cm	005-06
11	土師器	杯A	SK10637	口径 器高	15.3 2.9	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 1/12		005-03
12	須恵器	杯蓋	SK10637	口径 残高	19.5 2.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 1/12		005-02
13	灰釉陶器	椀	SK10637	口径 器高	15.0 4.5	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:2.5Y8/2	底部 6/12	底径 6.6cm	005-01
14	瓦	丸瓦	SK10637	残長 残幅	10.1 9.4	外面:ヘラナデ、布目圧痕	密	良	灰白 2.5Y8/2	1/4		006-01
15	灰釉陶器	段皿	SB10647	口径 器高	17.4 1.7	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶸茶815 素地:灰黄2.5Y7/2	口縁部 1/12		007-01
16	須恵器	甕A	SB10647	口径 器高	22.6 10.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	やや良	灰5Y6/1	口縁部 1/12		006-04
17	土師器	杯A	SB10636	口径 器高	12.6 3.2	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ、オサエ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 1/12		007-02
18	土師器	甕	SK10634	口径 器高	25.5 4.8	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 2/12		005-05
19	須恵器	壺	SK10634	底径 残高	4.7 6.0	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	黄灰 2.5Y6/1	体部 完形	最大径 8.0cm	005-04
20	土師器	皿A	SK10640	口径 器高	14.8 1.4	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		004-05
21	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	14.7 2.3	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙 5YR7/6	口縁部 1/12		004-01
22	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	16.7 2.6	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 3/12		001-07
23	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	15.4 3.0	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、工具ナデ、ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12		003-02
24	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	14.4 3.2	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	ほぼ 完形		001-06
25	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	17.8 3.1	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部 2/12		002-04
26	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	17.5 3.2	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12		002-05
27	土師器	杯A	SK10640	口径 器高	18.6 3.3	外面:ヨコナデ、ナデ、オサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12		004-02
28	土師器	甕A	SK10640	口径 器高	25.7 4.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12		001-03
29	土師器	甕A	SK10640	口径 残高	20.5 8.4	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	やや密	良	橙 5YR7/6	口縁部 3/12		004-06
30	土師器	甕A	SK10640	口径 残高	23.4 7.5	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、板ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12		002-02
31	土師器	甕A	SK10640	口径 残高	24.6 6.9	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 5/12		004-03
32	土師器	高杯A	SK10640	残高	11.3	外面:ナデ、ナデ、オサエ、ヘラケズリ 内面:ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	脚のみ		002-03
33	灰釉陶器	皿	SK10640	底径 残高	7.0 2.7	外面:ロクロナデ、ロクロケズリ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:白茶785 素地:灰白2.5Y7/1	底部 5/12		004-04
34	鉄製品	鋏	SK10640	残長 残幅	11.4 8.4	-	-	-	-	1/2	重さ 87.40g	007-07
35	鉄製品	釘	SK10640	残長幅	8.5 1.5	-	-	-	-	2/3	重さ 34.11g	007-08
36	鉄製品	釘	SK10640	残長幅	8.4 0.9	-	-	-	-	2/3	重さ 15.60g	007-09

第Ⅱ－３表　第180次調査　遺物観察表

ＳＫ10640出土遺物（20～36） 20は土師器皿Ａで、口縁端部が外反し、器壁は極めて薄い。残存状況が良くないため、調整は明瞭に残っていないが、外面全体にオサエが施されているようである。21～27は土師器杯Ａ。概ね口縁端部は外反し、外面体部下半にはオサエ痕が残る。28～31は土師器甕Ａ。29は器壁が極めて薄い。32は土師器高杯Ａ。脚部は中空で、長脚化しており、９面の面取りが行われる。33は灰釉陶器椀。器壁は厚く、貼り付けの角高台を有する。34～36は鉄製品。34はやや大型のもので、鎹でろうか。35・36は釘と考えられる。遺物は概ね斎宮Ⅱ－３期のものである。

５　まとめ

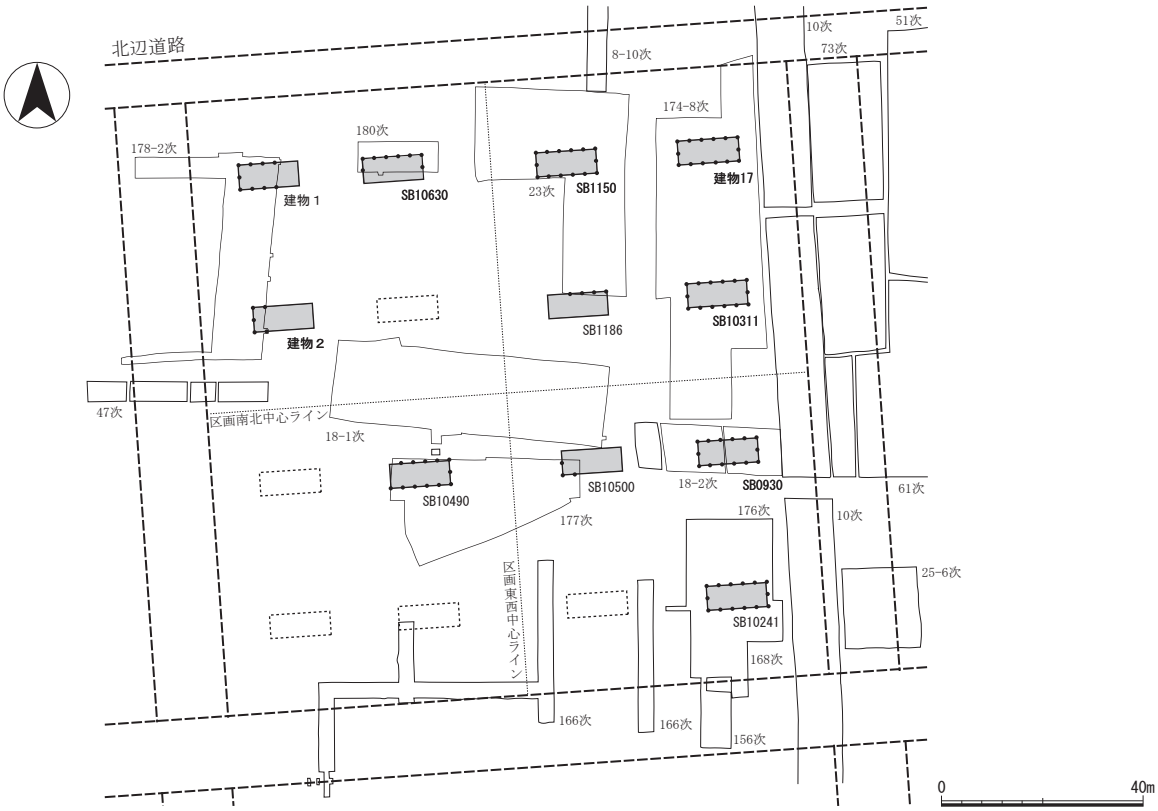
今回の調査は、下園東区画内に規格的に配置される建物の確認および区画北部の実態解明を目的として実施した。

（１）下園東区画の建物群について

下園東区画内では、これまでの調査で、建物軸もＮ４°～3.5°Ｗを示す桁行５間×梁間２間の東西棟が10棟（ＳＢ0930・1150・1186・10241・10311、ＳＢ10490・10500、第174－8次建物17、第178－2次調査の建物１・２）確認している。特に昨年度の調査によって、下園東区画の建物群が区画の西側にも展開することが判明しており、西加座北区画の建物群と同様に、16棟の建物が並ぶことが想定された。今回の調査で確認したＳＢ10630は、これらの建物群にあたるものであり、昨年度の調査成果に加え、規則的な配置となる建物群が下園区画全体に及ぶことを、さらに裏付けるものである。

また、建物群の時期については、柱穴からの出土遺物が少なく、多くの建物では、土坑や他の掘立柱建物との重複関係から、斎宮Ⅱ－２期に相当するものと考えている。しかし、第177次調査ＳＢ10490では、混入の可能性が高いものの、斎宮Ⅱ－１期に属する遺物も出土している。今回の調査では、ＳＢ10630が斎宮Ⅱ－１期のＳＫ10641に後出することを確認したことにより、建物群が斎宮Ⅱ－２期に属する可能性が高まったと言える。

西加座北区画と下園東区画の建物群は、ともに区



第Ⅱ－６図　下園東区画主要建物配置図〔Ⅱ－２期〕（1:1,500）

画全体に16棟の建物が規格的に配置されていることから、斎宮寮の寮庫になる可能性が高い。しかし、西加座北区画の建物群が斎宮Ⅱ－１期に属するのに対し、下園東区画が斎宮Ⅱ－２期にあたり、時期差が存在する。下園東区画では、Ⅱ－１期以前の遺構が少なく、斎宮Ⅱ－２期に入ってから、区画全体が利用されたことが窺える。斎宮は天長元（824）年に度会郡の離宮院に移転し、承和六（839）年に再び多気郡に戻る。建物群の存続時期を考えると、西加座北区画と下園東区画の建物群の時期差は、斎宮の移転前と、多気郡復帰後による可能性が考えられよう。

（２）下園東区画北部の様相について

第180次調査区は、区画北西部に位置している。下園東区画では、平安時代前期の斎宮Ⅱ－１期以前に遡る遺構は少なく、また、平安時代後期以降は、区画道路沿いを除いて、遺構・遺物は減少する傾向が見られる。

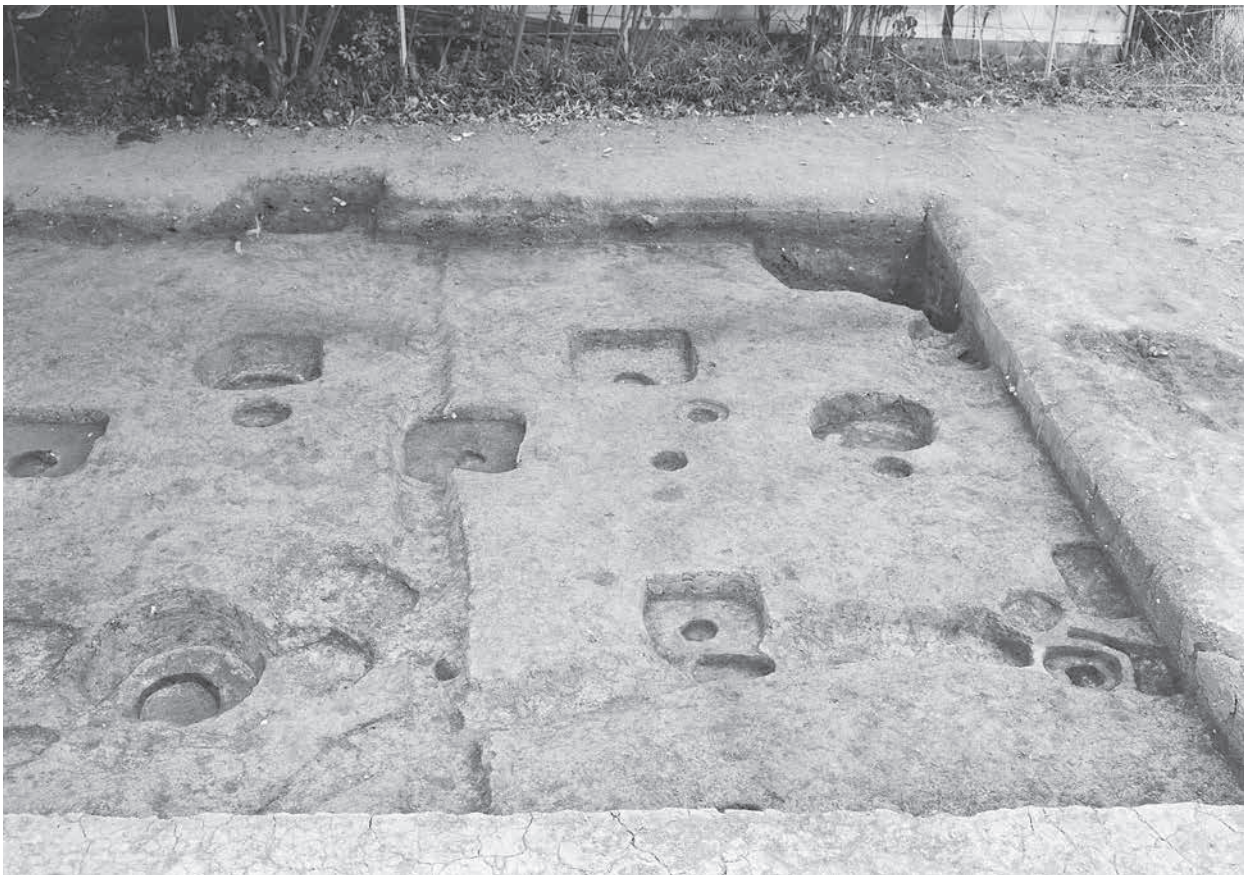
今回の調査でも、調査区中央で斎宮Ⅱ－１期の土坑が確認されているものの、概ね斎宮Ⅱ－２期～Ⅱ－４期の遺構や遺物が中心を占める。一方、調査区は狭隘ながら、斎宮Ⅲ期以降のものはほとんど見られず、区画全体の傾向と同様の様相を示している。今回の調査区は、北辺道路からおよそ10m南に位置しているが、斎宮Ⅲ期に下る遺構がほとんど見られないということは、区画道路沿いであっても、Ⅲ期においてはあまり機能していない部分も存在した可能性が考えられる。前述したように、下園東区画は斎宮Ⅱ－２期以降に本格的に建物等の土地利用がされるようになるものの、斎宮Ⅲ期には大半が衰退しており、区画として利用されていた期間は短かったと考えられる。　（新名　強）

ＳＢ10630（西から）

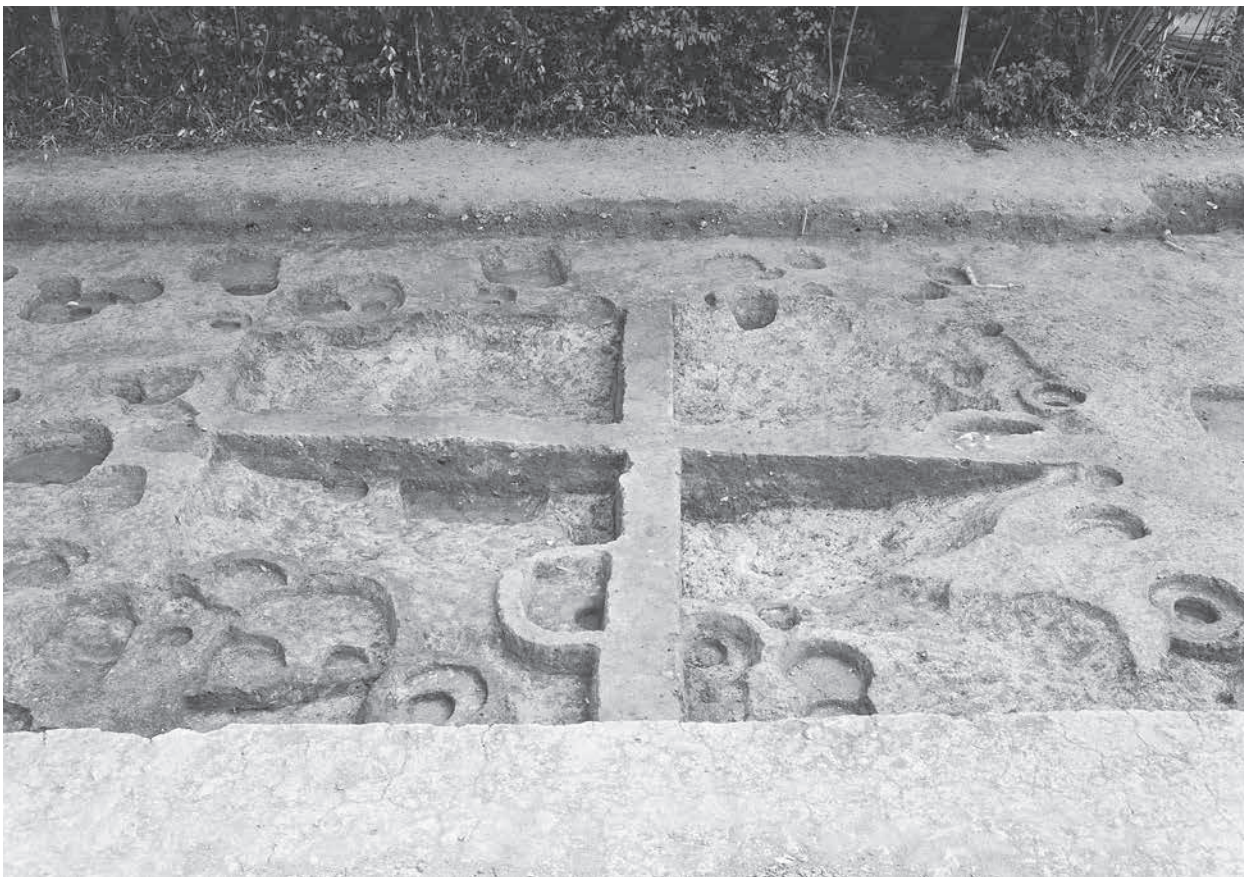
写真図版Ⅱ－２第180次調査遺構（２）

ＳＢ10630・ＳＫ10640（東から）

ＳＢ10645・10646・10647（北から）



ＳＢ10632・10633（北から）



ＳＫ10637・10639・10640（北から）

写真図版Ⅱ－４第180次調査遺物

7

10

13

14

16

19

24

32

Ⅲ　第181次調査
（６ＡＲ８　楽殿地区）

１　はじめに

第181次調査区は、史跡東半で確認している方格地割北辺の下園東区画北側に位置している。当該地では昭和49年度に第８－10次調査が行われている。これは斎宮跡の遺構の分布範囲を確定するために行われた調査であり、南北方向に幅約４ｍのトレンチが設けられた。この調査では、東西方向に延びる複数条の溝が検出されたほか、柱穴群が認められ、緑釉陶器椀の出土も報告されている。その後、斎宮跡では発掘調査の進展によりいわゆる平安時代の方格地割の存在が確認されたが、方格地割北側隣接地の実態についてはまだ不明な点が多い。本次調査においては、この方格地割北側の土地利用の解明を目的に調査を実施した。

なお、本次調査では第８－10次調査との対応関係を確認するため、調査区を重なるように設定している。また、調査区南側は、方格地割の北辺道路の北側側溝の有無を確認するため、幅1.5mでトレンチを設定した。

調査は平成25年７月23日から平成25年12月６日まで実施し、調査面積は269.6㎡であった。

２　地形と層位

調査区は標高約10.1mの平坦地であり、現況は砕石敷の広場である。

基本層位は、表土下約0.3mの標高約9.8mで地山面が確認できる。表土直下ですぐ地山である。地山は黄褐色土で、いわゆる黒ボク層は認められない。調査区南半は東西に複数の溝が走るが、この上部には包含層が一部認められた。遺構は地山上面で検出した。

３　遺構

第181次調査では、竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟、土坑12基、溝９条を確認した。遺構の時期は奈良時代から中世に及ぶ。調査区全体で柱穴が認められたが、掘立柱建物として認められるものは少なかった。

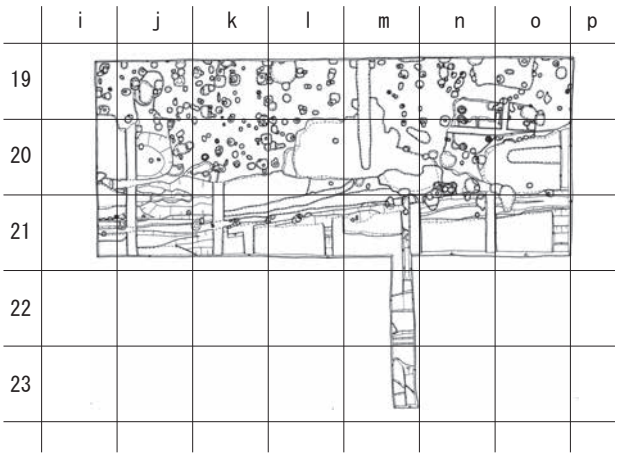
（１）斎宮Ⅰ期の遺構

ＳＨ10699　調査区北東で検出した竪穴住居である。南側３分の１が調査区内で検出され、北側に続く。南側の一辺の長さは約３ｍ。埋土を完掘していないため、壁溝、主柱穴の有無は不明である。竪穴住居ではなく、方形の土坑である可能性もあるが、南側に隣接するＳＨ10700の存在とあわせて竪穴住居として報告しておく。埋土からは土師器杯・椀Ｂ・甕・甑、須恵器、土錘、鉄釘が出土している。遺物の時期からみて、遺構はＩ－３期に属すると思われる。

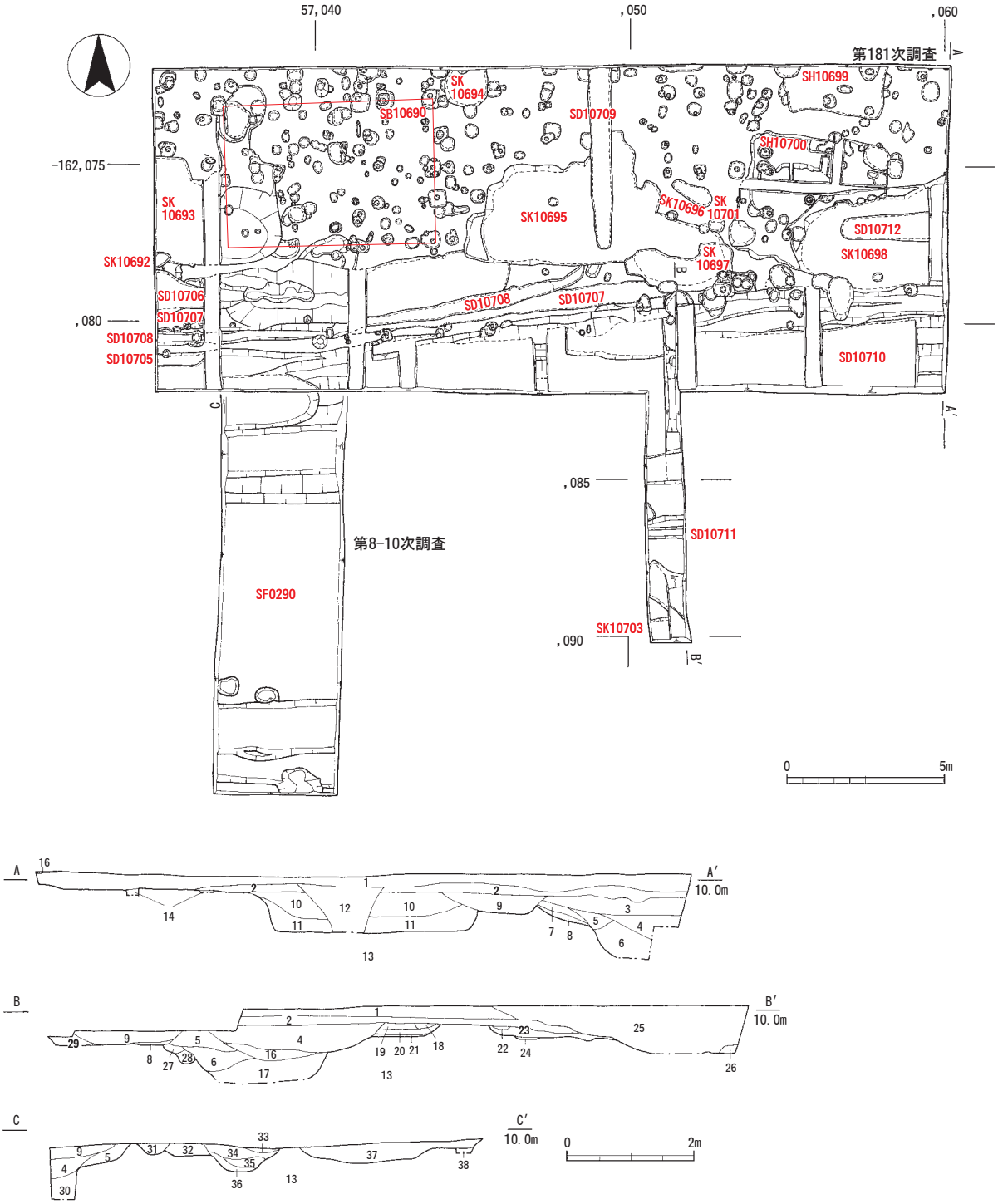
ＳＨ10700　調査区東端で検出した竪穴住居である。東西4.5m、南北４ｍの方形を呈する。全体が調査区内に収まるものの、東側は土坑ＳＫ10698が重複し、また地山面が南に向かって緩やかに下がっていくことから、南３分の２の遺存状況は良好とは言えない。壁溝は巡らず、主柱穴も判然としない。北辺の中央に焼土がまとまる部分が認められ、竈跡と推定できたが、遺存状況が悪く平面プランを確定することは出来なかった。埋土からは、土師器杯・甕、須恵器が出土しており、Ⅰ－３期に属すると考えられる。

（２）斎宮Ⅱ期の遺構

ＳＢ10690　調査区西北側で検出した、桁行３間×梁間２間の東西棟建物である。棟方向はＮ２°Ｗを



第Ⅲ－１図　第181次調査　グリッド図



1 10YR3/3 暗褐色粘質土に 10YR5/6 黄褐色土を 3%含む径 2cm 以下の礫を 1%含む〔表土〕
2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土〔包含層〕
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土〔SD10710〕
4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土〔SD10710〕
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土〔SD10705〕
6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土粘性やや高い〔SD10705〕
7 10YR4/4 褐色土
8 10YR4/1 褐灰色粘質土径 5cm 以下の砂礫を 1%含む
9 10YR3/2 黒褐色土に 10YR5/6 黄褐色土が 5%まじる〔SD10704〕
10 10YR4/4 褐色土に 10YR5/6 黄褐色土が 10%まじる〔SK10698〕
11 10YR4/1 褐灰色粘質土に径 1cm 以下の砂礫を 1%含む〔SK10698〕
12 10YR4/4 褐色土〔SD10712〕
13 10YR5/6 黄褐色土径 2mm 以下の礫を 1%含む〔地山〕
14 10YR3/3 暗褐色土
15 10YR3/2 黒褐色土
16 10YR3/2 黒褐色粘質土径 3cm 以下の礫をわずかに含む〔SD10710〕
17 10YR3/3 暗褐色粘質土径 5cm 以下の礫を 2%程度含む〔SD10705〕
18 10YR4/2 灰黄褐色土
19 10YR5/4 にぶい黄褐色土
20 10YR4/3 にぶい黄褐色土
21 10YR4/3 にぶい黄褐色土に径 2cm の礫が 50%まじる
22 10YR4/1 褐灰色土
23 10YR5/3 にぶい黄褐色土〔SD10711〕
24 10YR4/2 灰黄褐色土に径 2cm 以下の礫が 4%まじる
25 10YR4/2 灰黄褐色土に 10YR7/8 黄橙色のブロックが 15%まじる
26 10YR3/1 黒褐色土〔SK10703〕
27 10YR4/3 にぶい黄褐色土に 10YR6/6 明黄褐色土のブロックが 70%まじる
28 10YR4/2 灰黄褐色土
29 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に 7.5YR6/8 橙色粘質土のブロックを 20%含む
30 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR8/6 黄橙色土のブロックを 3%含む
31 10YR4/1 褐灰色土に 10YR5/8 黄褐色土ブロックが 20%まじる〔SD10708〕
32 10YR2/3 黒褐色土〔SD10707〕
33 10YR3/3 暗褐色土〔SD10706〕
34 10YR4/4 褐色土に 7.5YR6/8 橙色土ブロックが 5%まじる〔SD10706〕
35 10YR2/2 黒褐色粘質土〔SD10706〕
36 10YR2/2 黒褐色粘質に 10YR6/8 明黄褐色ブロックを 5%含む〔SD10706〕
37 10YR3/2 黒褐色粘質土〔SK10693〕
38 10YR3/3 暗褐色

第Ⅲ－２図　第181次調査　遺構平面図（1:200）・土層断面図（1:100）

測る。柱掘形は一辺約0.5〜0.6mの隅丸方形を呈する。ＳＫ10693に先行する。ＳＤ10705、ＳＤ10710と方位が揃い、また柱掘方が隅丸方形を呈することから、Ⅱ－４期に属すると考えられよう。

ＳＫ10692　調査区西端で検出した略円形の土坑である。東西0.5m、南北0.5mをはかり、西側は調査区外へと続く。検出面からの深さは約８㎝である。埋土からは（１）の土師器杯や、須恵器、灰釉陶器が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅡ－４期と考えられる。

ＳＫ10694　調査区中央北端で検出した円形の土坑である。東西1.4m、南北1.2mをはかる。埋土を完掘していないため、深さは不明である。埋土からは、土師器皿、甕、椀Ｂ、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土錘が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅡ－４期と考えられる。

ＳＫ10696　調査区中央付近で検出した不整形の土坑である。東西1.3m、南北0.9mをはかる。埋土を完掘していないため深さは不明である。埋土からは、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。遺物は小片が多く、遺構の所属時期の特定は難しいが、Ⅱ－４期頃と考えられる。

ＳＤ10705　調査区南端で検出した東西方向の溝である。断面の観察からは、幅2.6m以上、深さ0.8m以上を測る。溝の方位は東西方向を基準にＥ２°Ｎである。溝の埋土からは、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。埋没時期はⅡ期の範疇と思われる。重複関係からはＳＤ10704、ＳＤ10710より古い。

ＳＤ10707　調査区南側で検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅0.6m、深さ0.2mを測り、溝の方位は東西方向を基準にＥ７°Ｎである。溝の埋土からは土師器、灰釉陶器が出土しており、埋没時期はⅡ－４期と考えられる。遺構の重複関係からは、ＳＤ10708、ＳＫ10697より古い。

（３）斎宮Ⅲ－２期の遺構

ＳＤ10710　調査区南端で検出した東西方向の溝である。幅2.8m、深さ0.55mを測る。平面的に把握が困難であったため溝の方位は断面から推測するしかないが、東西方向を基準にＥ２°Ｎと考えられる。溝の埋土からは、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、埋没時期はⅢ－２期頃と考えられる。遺構の重複関係からは、ＳＤ10705より新しくＳＤ10704より古い。

（４）斎宮Ⅲ－２〜３期の遺構

ＳＫ10695　調査区中央で検出した不整形の土坑である。東西8.1m、南北4.3mをはかる。埋土を完掘していないため深さは不明である。埋土からは、土師器皿・甕、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁椀等が出土している。遺物から遺構の所属時期はⅢ－２〜３期と考えられる。

ＳＫ10697　調査区中央で検出した不整形の土坑である。東西3.5m、南北1.6mをはかる。埋土を完掘していないため、深さは不明である。埋土からは、土師器甕、ロクロ土師器、羽釜、須恵器壺、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅢ－２〜３期と考えられる。

ＳＫ10703　調査区南側の拡張トレンチ南端で検出した土坑である。トレンチ端にあり、攪乱の影響を受けているため、形状は不明である。埋土からは、山茶椀、青磁、白磁が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅢ－２期以降と考えられる。

ＳＤ10706　調査区西端で検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅1.7m、深さ0.8mを測り、溝の方位はほぼ東西方向の正方位である。溝の埋土からは、土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓が出土したことから、埋没時期はⅢ－２〜３期頃と考えられる。重複関係からはＳＤ10707より新しく、ＳＫ10695より古い。

（４）斎宮Ⅲ－３期の遺構

ＳＫ10693　調査区西端で検出した不整形の土坑である。東西５m、南北3.5mをはかり、西側は調査区外へ続く。第８－10次調査では調査区内の埋土を完掘しており、深さは0.8mを測る。埋土からは、土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器山茶椀、白磁、土錘、鉄滓等が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅢ－３〜４期と考えられる。

ＳＫ10698　調査区東端で検出した不整形の土坑である。東西５m、南北3.6m、深さは1.5mである。埋土からは、土師器皿、ロクロ土師器台付皿、須恵器、緑釉陶器、山茶椀、白磁が出土しており、遺物から遺構の所属時期はⅢ－３期と考えられる。

遺構名	調査時遺構名	ピット番号 ※(　)はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
ＳＢ10690	建物１	(j19)p5/(k19)p1. p3. p15/(k20)p7	Ⅱ期	3(6.9)×2(4.6)	(桁行) 2.3 (梁間) 2.3	東西	N2°W	SK10693より古

第Ⅲ－１表　第181次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
ＳＫ10692	土坑２	i20	Ⅱ－４	土師器杯、須恵器、灰釉陶器	
ＳＫ10693	土坑３	j19, j20	Ⅲ－３	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、土錘、鉄滓	
ＳＫ10694	土坑４	l19	Ⅱ－４	土師器皿、甕、椀Ｂ、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土錘	
ＳＫ10695	土坑５	l19, l20, m19, m20	Ⅲ－２～３	土師器皿・甕、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁輪花椀・玉縁椀	
ＳＫ10696	土坑６	m19, m20, n19, n20	Ⅱ－４頃	土師器、須恵器、灰釉陶器	
ＳＫ10697	土坑７	m20, n20	Ⅲ－２～３	土師器甕、ロクロ土師器、羽釜、須恵器壺、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓	
ＳＫ10698	土坑８	n20, o20	Ⅲ－３	土師器皿、ロクロ土師器台付皿、須恵器、緑釉陶器、山茶椀、白磁	ＳＨ10700より新
ＳＨ10699	土坑９	n19, 019	Ⅰ－３	土師器杯・椀Ｂ・甕・甑、須恵器、土錘、鉄釘	
ＳＨ10700	土坑10	n19, 019, n20, o20	Ⅰ－３	土師器杯・甕、須恵器	ＳＫ10698より古
ＳＫ10701	土坑11	n20	－	土師器、須恵器壺	ＳＨ10700より新
ＳＫ10702	土坑12	o20	Ⅲ－３	土師器、須恵器	ＳＫ10698より新 ＳＤ10704より古
ＳＫ10703	土坑14	m23	Ⅲ－２～３	山茶椀、青磁、白磁	
ＳＤ10704	溝１	i20, j20	Ⅲ－３	土師器、ロクロ土師器、土師器鍋、山茶椀、白磁、砥石	ＳＤ10705、ＳＤ10710より新
ＳＤ10705	溝２	i20, j20	Ⅱ	土師器、須恵器、灰釉陶器、羽釜	
ＳＤ10706	溝３	i20, j20, k20, l20	Ⅲ－２～３	土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄滓	ＳＤ10707より新 ＳＫ10695より古
ＳＤ10707	溝４	i20, i21, j20, j21, k20, k21, l20, m20	Ⅱ－４	土師器、灰釉陶器	ＳＤ10708、ＳＫ10697より古
ＳＤ10708	溝５	i21, j21, k20, k21, l20, m20	15世紀前半	土師器皿、伊勢型鍋、羽釜、白磁、須恵器甕	ＳＤ10709(溝６)と一連 ＳＤ10706、ＳＤ10707より新
ＳＤ10709	溝６	m20, m19	15世紀前半	土師器皿、伊勢型鍋、須恵器鉢、山茶椀、土錘	ＳＤ10708(溝５)と一連 ＳＫ10695より新
ＳＤ10710	溝８	k21, l21, m21, n21, 021	Ⅲ－２	土師器、須恵器、無釉陶器底部	ＳＤ10705より新 ＳＤ10704より古
ＳＤ10711	溝10	m22	－	須恵器	
ＳＤ10712	溝11	o20	近世	焙烙	ＳＫ10698より新

第Ⅲ－２表　第181次調査　遺構一覧表

ＳＫ10702　調査区南東側で検出した楕円形の土坑である。東西0.8m、南北1.4mをはかる。埋土を完掘していないため深さは不明である。埋土からは土師器、須恵器が出土している。遺構の重複関係からはＳＫ10698に後出し、ＳＤ10704に先行する。Ⅲ－３期に属する遺構だろう。

ＳＤ10704　調査区南端で検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅１m、深さ0.2mを測り、溝の方位は東西方向を基準にＥ10°Ｎである。溝の埋土からは、土師器、ロクロ土師器、土師器鍋、山茶椀、白磁、砥石等が出土しており、埋没時期はⅢ－３期頃と考えられる。ＳＤ10705、ＳＤ10710のいずれよりも新しい。

（５）中世以降の遺構

ＳＤ10708　調査区南側で検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅0.5m、深さ0.15mを測る。溝はやや湾曲しながら南西から北東に向かって続き、ＳＤ10709に接続するものと思われる。溝の埋土からは、土師器皿、伊勢型鍋、羽釜、白磁等が出土しており、遺物の時期から15世紀前半の遺構であると考えられる。遺構の重複関係からは、ＳＤ10706、ＳＤ10707より新しい。

ＳＤ10709　調査区中央で検出した南北方向の溝である。遺構検出面で幅0.6mを測る。溝の埋土からは、土師器皿、伊勢型鍋、須恵器鉢、山茶椀、土錘が出土している。遺物の時期から15世紀前半の遺構である。ＳＤ10708と一連の遺構と見てよいだろう。重複関係からは、ＳＫ10695より新しい。

ＳＤ10712　調査区東端で検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅0.9mを測る。溝の埋土からは、焙烙などが出土しており、近世の溝と考えられる。

（６）時期が不明な遺構

ＳＫ10701　調査区東側で検出した略円形の土坑である。東西0.9m、南北0.9mをはかる。埋土を完掘していないため、深さは不明である。埋土からは、土師器、須恵器が出土しているが、時期の特定には至らない。遺構の重複関係からは、ＳＨ10700に後出すると考えられる。

ＳＤ10711　調査区南側の拡張トレンチで検出した東西方向の溝である。遺構検出面で幅３m以上、深さ0.3mを測り、溝の南側肩は攪乱によって判然としない。溝の埋土からは須恵器が出土している。遺構の時期は不明である。

４　遺物

遺物は整理箱で31箱出土した。

ＳＫ10692出土遺物（１）　（１）は土師器杯Ａ。体部2/3までオサエの調整がされる。Ⅱ－4期頃の土器とみておく。

ＳＫ10693出土遺物（２～７）　（２）～（４）は土師器小皿である。口径は7.8～8.9㎝、器高は1.0～1.3㎝。（５）は陶器山茶椀である。胎土には直径２㎜程度の白色砂粒が含まれ、高台にはモミガラ痕が認められる。（６）は白磁皿である。見込みに圏線が施され、底部には高台がなく、施釉されない。（７）は土錘。いずれもⅢ－３期に属するとみてよいだろう。

ＳＫ10694出土遺物（８～10）　（８）はロクロ土師器杯、（９）は灰釉陶器壺である。(10) は土錘である。Ⅲ－２～３期に属する。

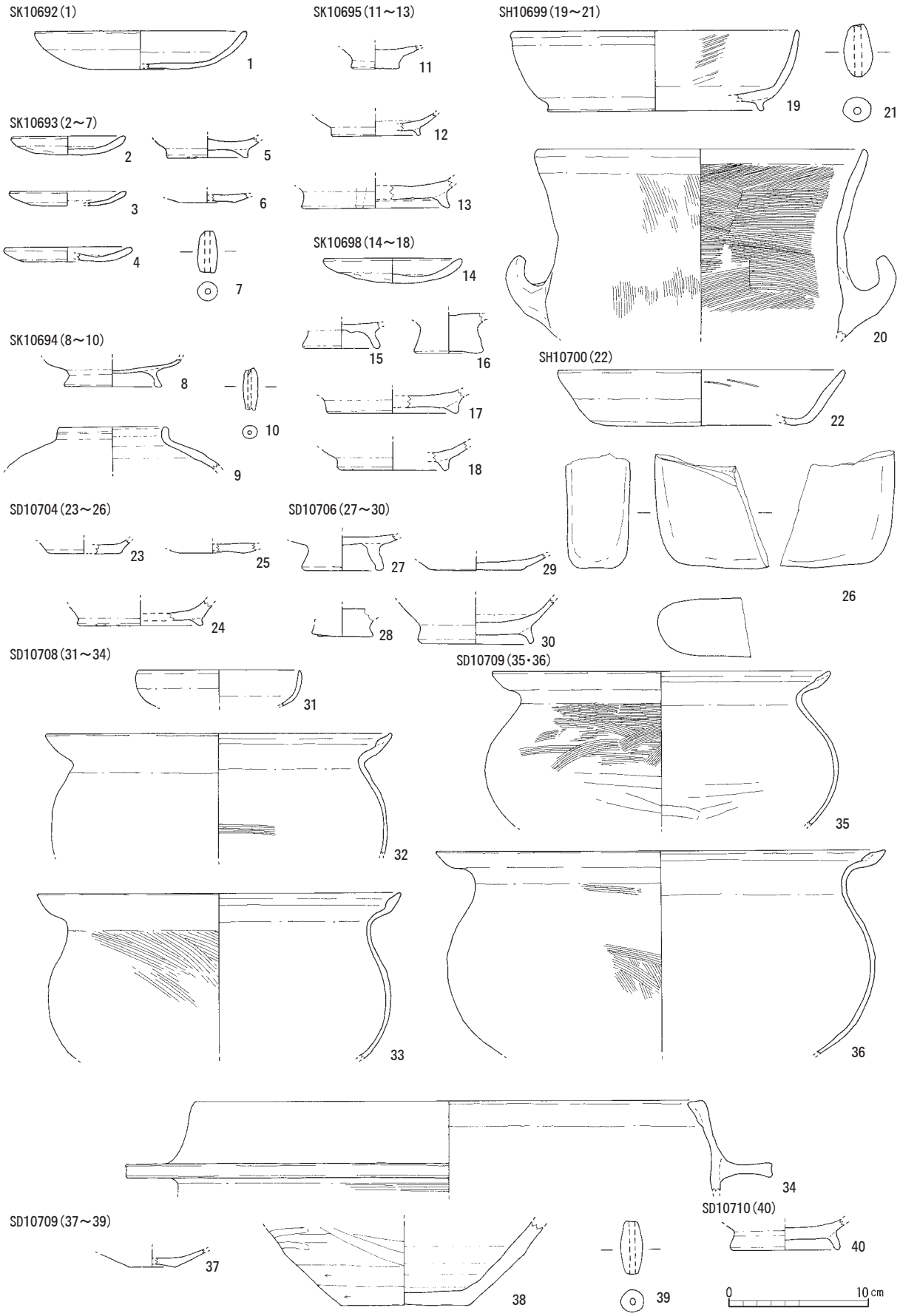
ＳＫ10695出土遺物（11～13）　(11) はロクロ土師器台付杯で、高台は中実の柱状高台である。(12)、(13) は無釉陶器椀である。Ⅲ－２期に属する。

ＳＫ10698出土遺物（14～18）　(14) は土師器小皿である。口径9.7㎝。(15)・(16) はロクロ土師器台付杯で (16) は柱状高台である。(17)・(18) は陶器山茶椀である。いずれも胎土は精良だが、高台にはモミガラ痕が認められる。Ⅲ－２～３期の土器と見てよいだろう。

ＳＨ10699出土遺物（19～21）　(19) は土師器杯Ｂである。器壁の遺存状況がわるく観察は難しいが、内面に暗文がわずかに認められる。(20) は土師器甑である。外面は縦方向、内面は横方向のハケメが施される。(21) は土錘である。Ⅰ期の範疇におさまると考えられる。

ＳＨ10700出土遺物（22）　(22) は土師器杯Ａである。器高が4.0㎝と深く、底部にケズリを施す。Ⅰ期の範疇におさまるのではないかと考えられる。

ＳＤ10704出土遺物（23～26）　(23) はロクロ土師器小型杯である。(24) は陶器山茶椀で、高台にはモミガラ痕が認められる。(25) は白磁である。小



第Ⅲ－３図　第181次調査　遺物実測図（１）（1:4）

片のため、器形は不明。(26) は砥石である。残存する４面いずれにも擦痕が認められる。Ⅲ－２～３期の遺物であろう。

ＳＤ10706出土遺物（27～30） (27) は土師器台付杯である。(28) はロクロ土師器小型杯で、柱状高台をもつ。(29) はロクロ土師器杯である。(30) は無釉陶器椀である。胎土は精良。Ⅲ－２期の遺物と見てよいだろう。

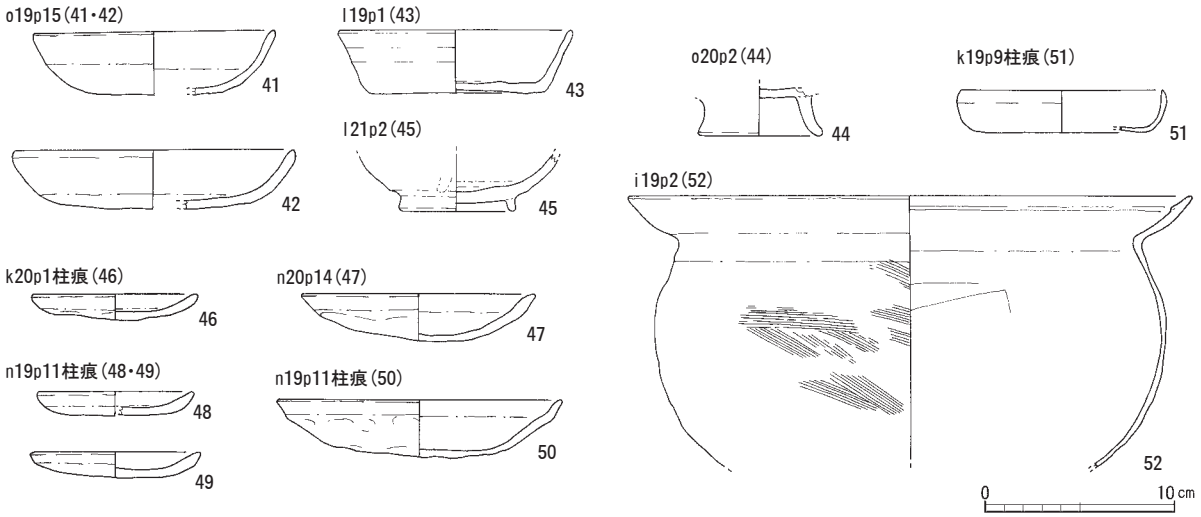
ＳＤ10708出土遺物（31～34） (31) は土師器皿である。口径11.4cm、体部は内湾し、口縁端部はそのままおさめる。(32)・(33) は土師器鍋である。いわゆる伊勢型鍋で口縁端部を折り返し、頸部と体部の境界は不明瞭である。(34) は土師器羽釜である。15世紀前半の所産とみてよいだろう。

ＳＤ10709出土遺物（35・36） (35)・(36) は土師器鍋で、特徴は (32)・(33) と共通する。(37) は白磁皿である。釉色は黄色がかり、底部は高台がなく釉も施されない。15世紀前半の所産とみてよいだろう。

ＳＤ10709出土遺物（37～39） (38) は陶器練鉢である。胎土は荒く、直径５㎜までの砂粒を含む。(39) は土錘である。

ＳＤ10710出土遺物（40） (40) は無釉陶器椀である。胎土は精良で高い高台を持つ。

pit出土遺物（41～52） (41)、(42) は同一の柱穴から出土した遺物である。(41)・(42) は土師器杯である。(41) は口径12.6cm。外面はユビオサエが認められ、口縁部はヨコナデする。(42) は口径14.6cm。内外面ともにヨコナデする。(43) は須恵器杯である。胴部は外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや内湾して端部は丸く収める。Ⅰ期～Ⅱ－１期の所産であろう。(44) は土師器台付杯である。Ⅲ期の所産。(45) は灰釉陶器椀である。胎土は精良。(46) は土師器小皿である。口径8.5cm。(47) は土師器皿である。器高は2.5cmと浅く、口縁部のみヨコナデして外面に面をもつ。48、49は同一の柱穴から出土した遺物である。Ⅲ－３期の所産だろう。(48) は土師器小皿で、口径８cm。(49) は土師器小皿で口径8.7cm。(48)、(49) はⅢ－２～３期の所産とみてよいだろう。(50) は土師器皿である。器高は3.1cmと浅く、口縁部のみヨコナデして外面に面をもつ。Ⅲ－３期の所産だろう。(51) は土師器皿である。体部は内湾し、口縁端部はそのままおさめる。(52) は土師器鍋である。(32)、(33)、(35)、(36) と特徴は共通する。15世紀前半の所産だろう。



第Ⅲ－４図　第181次調査　遺物実測図（２）(1:4)

番号	器種	器形	遺構番号	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	杯A	S K10692	口径 14.9 器高 2.8	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや粗	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 8/12		001-01
2	土師器	小皿	S K10693	口径 7.8 器高 1.3	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12		001-03
3	土師器	小皿	S K10693	口径 8.1 器高 1.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 4/12		001-02
4	土師器	小皿	S K10693	口径 8.9 器高 1.0	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部 4/12		001-04
5	陶器	山茶椀	S K10693	底径 5.8 残高 1.5	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕、モミガラ痕 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	底部6/12		001-05
6	白磁	皿	S K10693	底径 4.0 残高 0.6	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:施釉	密	良	釉:水縹993 素地:灰白2.5Y8/2	底部3/12		009-01
7	土製品	土錘	S K10693	長さ 3.0 幅 1.4 重さ 6.03g	外面:ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	ほぼ 完形		009-02
8	ロクロ 土師器	杯	S K10694	底径 6.6 残高 2.0	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	底部ほぼ完存 口縁部2/12		001-07
9	灰釉陶器	壺	S K10694	口径 7.6 残高 3.1	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶸茶815 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部2/12		001-06
10	土製品	土錘	S K10694	長さ 3.0 幅 1.1 重さ 2.38g	外面:ナデ	密	良	褐灰10YR5/1	ほぼ完形		009-03
11	ロクロ 土師器	台付皿	S K10695	底径 3.0 残高 1.6	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白10YR8/2	底部ほぼ完形		001-10
12	無釉陶器	椀	S K10695	底径 6.1 残高 1.6	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:にぶい黄橙10YR7/2	底部2/12		001-09
13	無釉陶器	椀	S K10695	底径 10.1 残高 2.2	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰黄2.5Y7/2	底部3/12		001-08
14	土師器	小皿	S K10698	口径 9.7 器高 1.8	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部2/12		002-01
15	ロクロ 土師器	台付杯	S K10698	底径 5.0 残高 1.9	外面:貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	底部10/12		002-04
16	ロクロ 土師器	台付杯	S K10698	底径 4.4 残高 2.9	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	底部5/12		002-02
17	陶器	山茶椀	S K10698	底径 8.8 残高 1.7	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部2/12		002-03
18	陶器	山茶椀	S K10698	底径 7.4 残高 2.1	外面:ロクロナデ、貼付高台、モミガラ痕 内面:ロクロナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	底部2/12		002-05
19	土師器	杯B	S H10699	口径 20.2 器高 5.8	外面:ヨコナデ、ナデ、貼付高台 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR616	底部1/12未満 口縁部1/12		002-06
20	土師器	甑	S H10699	口径 23.2 残高 13.5	外面:ヨコナデ、ハケメ、オサエ・ナデ 外面:ヨコナデ、ハケメ、、オサエ	密	良	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部4/12		002-07
21	土製品	土錘	S H10699	長さ 3.8 幅 2.1 重さ 11.93g	外面:ナデ	密	良	灰５Y5/1	ほぼ完形		009-04
22	土師器	杯A	S H10700	口径 20.2 器高 4.0	外面:ヨコナデ、ヘラケズリ 外面:ヨコナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部2/12		003-01
23	ロクロ 土師器	小型杯	S D10704	底径 4.8 残高 1.0	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	橙7.5YR7/6	底部4/12		003-03
24	陶器	山茶椀	S D10704	底径 8.5 残高 1.8	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕，モミガラ痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部2/12		003-02
25	白磁		S D10704	底径 4.8 残高 0.7	外面:施釉、糸切痕 内面:施釉	密	良	釉:青白橡989 素地:灰黄2.5Y7/2	底部2/12		009-05
26	石製品	砥石	S D10704	厚さ 4.5 重さ 429g	―	―	―	灰黄2.5Y6/2	―		009-06
27	土師器	台付杯	S D10706	底径 5.2 残高 2.6	外面:オサエ・ナデ、貼付高台、ナデ 内面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	底部ほぼ完形		003-06
28	ロクロ 土師器	小型杯	S D10706	底径 4.3 残高 2.0	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	橙7.5YR6/6	底部2/12		003-05
29	ロクロ 土師器	杯	S D10706	底径 6.1 残高 1.2	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	やや粗	良	浅黄橙10YR8/4	底部完形		003-04
30	無釉陶器	椀	S D10706	底径 7.8 残高 3.2	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部5/12		003-07
31	土師器	皿	S D10708	口径 11.4 残高 2.6	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部4/12		003-08
32	土師器	鍋	S D10708	口径 24.5 残高 8.7	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ハケメ	やや粗	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部3/12		003-09
33	土師器	鍋	S D10708	口径 25.8 残高 11.9	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ハケメ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12		004-01
34	土師器	羽釜	S D10708	口径 36.2 残高 6.6	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部3/12		004-02
35	土師器	鍋	S D10709	口径 23.8 残高 11.1	外面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	やや密	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部3/12		006-01
36	土師器	鍋	S D10709	口径 31.7 残高 14.6	外面:ヨコナデ、ハケメ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12		005-02
37	白磁	皿	S D10709	底径 3.1 残高 1.3	外面:施釉、ロクロナデ、糸切痕 内面:施釉	密	良	釉:象牙色789 素地:灰黄2.5Y7/2	底部5/12		010-01
38	陶器	練鉢	S D10709	底径 9.1 残高 6.0	外面:ヘラケズリ、糸切痕 内面:ヘラケズリ、ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	底部5/12		005-01
39	土製品	土錘	S D10709	長さ 3.8 幅 1.5 重さ 7.72g	外面:ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	完形		010-02
40	無釉陶器	椀	S D10710	底径 7.5 残高 2.2	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部3/12		006-03
41	土師器	杯	柱穴	口径 12.6 器高 3.4	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部2/12		008-01
42	土師器	杯	柱穴	口径 14.6 器高 3.1	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部6/12		008-07
43	須恵器	杯	柱穴	口径 12.2 器高 3.3	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい褐7.5YR5/3	口縁部4/12		007-03
44	ロクロ 土師器	台付杯	柱穴	底径 6.3 残高 2.5	外面:ロクロナデ、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	底部8/12		008-03
45	灰釉陶器	椀	柱穴	底径 5.8 残高 3.0	外面:ロクロナデ、貼付高台、糸切痕 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶸茶815 素地:灰白2.5Y7/1	底部8/12		007-04
46	土師器	小皿	柱穴	口径 8.5 器高 1.4	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部11/12		007-02
47	土師器	杯	柱穴	口径 12.2 器高 2.5	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部4/12	粘土接合痕	007-05
48	土師器	小皿	柱穴	口径 8.0 器高 1.3	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部2/12		008-02
49	土師器	小皿	柱穴	口径 8.7 器高 1.4	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部6/12		008-05
50	土師器	皿	柱穴	口径 14.8 器高 3.1	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12		008-06
51	土師器	皿	柱穴	口径 10.6 器高 2.3	外面:ヨコナデ、オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ、ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部12/12		008-04
52	土師器	鍋	柱穴	口径 29.5 残高 14.4	外面:ヨコナデ、ハケメ、、ヘラケズリ 内面:ヨコナデ、工具ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部5/12		007-01

第Ⅲ－３表　第181次調査　遺物観察表

5　まとめ

第181次調査では、斎宮跡のいわゆる方格地割の北側の状況を確認した。

（1）奈良時代

まず、方格地割が設定される以前の奈良時代の段階では、竪穴住居２棟が認められた。奈良時代以前の斎宮は史跡の中でも西側の祓川段丘崖に近い部分に立地すると考えられている。その一方で、今次調査で検出したのと同様の竪穴住居は遺跡内の各地で検出されている。これら竪穴住居が『斎宮』とどのような関係にあったのかは、竪穴住居の分布状況も含め、今後解明すべき課題であろう。

（2）平安時代

次に、第181次調査地点における特徴的な遺構として、溝と不整形の土坑について述べる。

調査区南端で検出された溝のうち、ＳＤ10705、ＳＤ10710は調査区を東西に横断する。これらの溝は、第42－１次調査のＳＤ2625、第35次・第54次調査のＳＤ1910、ＳＤ1911とほぼ同一直線上にならぶ。これらの溝は、方格地割北辺道路ＳＦ0290の北側溝、もしくはそれを踏襲する溝と考えられ、今回検出したＳＤ10705、ＳＤ10710、ＳＤ10704も同様の性格をもつと考えられる。一方、南側溝を踏襲した溝は、第51次調査のＳＤ0291、第80次のＳＤ2340等が該当すると考えられ、本次調査区南西の第８－９次調査区の南端で検出されている幅1.6～1.8mの東西溝がこれにあたるものと考えられる。しかし、本次調査区で検出したＳＤ10705、ＳＤ10710はⅡ期の終わりからⅢ期の初めに埋没する。

また、調査区全体で認められた土坑は、埋土からはいわゆるロクロ土師器や山茶椀が出土しており、遺構の所属時期は斎宮Ⅲ－２期以降と推定される。これら土坑から出土する遺物はほとんどが小片であり、完形品はほとんど認められず、廃棄土坑という性格を推定できる。

以上のことをふまえると、本調査地付近では、Ⅱ期の終わり頃からⅢ期の初めに土地利用の大きな変化が起こっていることが理解できよう。まず、Ⅱ－３期頃までは遺構、遺物ともに少ない状況が続く。しかしⅡ期の終わりからⅢ期の初めには方格地割北辺道路北側溝を踏襲したと考えられる東西溝が埋没し、かわって不整形土坑が掘削される。

斎宮跡の方格地割においては、別の地点でもこの時期に土地利用の変化が指摘されている。内院では、Ⅱ－４期に鍛冶山西区画で建物が見られなくなるとともに、Ⅲ－１期に牛葉東区画において二条の溝による区画（築地？）が新たに営まれるなど、内院の再編成が行われている。また、この時期には方格地割の外縁部北側でも遺構の密集する地区が認められるなど、方格地割の内外で大きな土地利用の変化が発生している（1）。本調査区における溝、土坑のあり方は平安時代後期におけるこうした斎宮跡の変化と一連のものとして考えることができ、この時期の土地利用の変化については今後も注意していく必要があるだろう。

（3）中世

最後に、本次調査では15世紀前半の溝が２本検出された。これらの溝は本来一連のものであった可能性が高い。溝は東西と南北につながり、溝の深さも約15cmと浅いことから、何らかの区画を意識した溝である可能性があろう。また溝からは完形に近い土師皿と伊勢型鍋がセットで検出されており、周辺で人の生活が営まれていたことを想定させるものである。中世段階での集落では、本調査地の東側で14世紀代の蓄銭が検出されており、そうした居住域が本次調査区周辺まで広がっていた可能性があろう。

（4）まとめ

以上、本次調査においては、方格地割の北側隣接地の実態の一端を明らかにしえたと言えよう。特に、平安時代後期における土地利用の大きな変化は斎宮の広大な範囲に及んでおり、古代から中世へ向かう社会の変化を示すものとして評価できよう。

註

（1）大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史』

写真図版Ⅲ－１第181次調査遺構（１）

ＳＤ10711（北から）

ＳＨ10699・10700（東から）

ＳＢ10690（東から）

ＳＤ10706・10707・10708（東から）

写真図版Ⅲ－３第181次調査遺物

14

16

22

36

38

40

49

50

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいにじゅうごねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成25年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤文彦　新名　強
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027
発行年月日	西暦　2015年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡（たきぐん）明和町（めいわちょう） 斎宮（さいくう）・竹川（たけがわ）	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20130723 ～ 20131206	96.6㎡ （第180次） 269.6㎡ （第181次）	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡第180次	官衙	平安	掘立柱建物 溝　土坑	土師器　須恵器 灰釉陶器　平瓦 志摩式製塩土器 鉄製品	規則的に配置される建物群を確認
斎宮跡第181次	官衙	平安	掘立柱建物 溝　土坑 竪穴住居	土師器　須恵器 灰釉陶器　山茶椀 土錘　砥石	方格地割北辺道路北側溝を踏襲する溝を確認

要約

第180次調査は平安時代斎宮の方格地割でいう「下園東区画」北西部にあたる。掘立柱建物では「下園東区画」で規則的に配置された建物群のうち１棟を確認したのをはじめ、平安時代前期から後期にかけての建物10棟を確認した。

第181次調査は方格地割北側に位置する「楽殿地区」にあたる。方格地割北辺道路北側溝を踏襲する溝を確認したほか、奈良時代後期の竪穴住居や室町時代の区画溝を確認した。

史　跡　斎　宮　跡
平成25年度
発 掘 調 査 概 報
2015年３月27日
編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　光出版印刷株式会社